江戸から明治の自然科学を拓いた人

伊藤圭介没後100年記念シンポジウム

名古屋大学附属図書館

目　次

シンポジウム開催にあたって …… 1

伊藤圭介肖像画 …… 2

基調講演「伊藤圭介と日本の科学のあけぼの」…… 3

圭介の決意 …… 6

１．圭介の日記からみた人間像 …… 11

２．伊藤圭介と動物 …… 17

３．圭介の得た対外情報 …… 20

４．シーボルトと圭介 …… 23

５．圭介と尾張の洋学 …… 26

６．現代植物学からみた圭介の業績 …… 29

伊藤圭介略歴 …… 32

関連する展覧会

「伊藤圭介と尾張本草学」

平成13年９月15日～10月14日
於：名古屋市博物館
TEL：052－853－2655　FAX：052－853－3636

「伊藤圭介と植物」

平成13年９月15日～10月14日
於：名古屋市東山植物園
TEL：052－782－2111　FAX：052－782－2259

シンポジウム開催にあたって

このたび、名古屋大学附属図書館と名古屋市博物館が共催で、伊藤圭介没後100年記念シンポジウムを開催することになりました。

伊藤圭介（1803～1901）は、98歳の長寿でしたので、ほぼ生誕200年記念と言ってもよいですが、江戸末期から明治にかけて活躍した植物学者かつ医師でした。シーボルトの弟子でもあり、江戸末期に名古屋が生んだ近代博物学者という言い方もできます。名古屋大学医学部の創設にも深い関わりがあります。日本の理学博士第１号でもあります。まさに今回のシンポジウムのテーマである「江戸から明治の自然科学を拓いた人」と言うことができます。

名古屋大学附属図書館は、「錦窠（きんか）植物図説」をはじめとする圭介の自筆稿本を所蔵しており、今回同時に名古屋市博物館で行われている展覧会に、これらを出陳しています。文部科学省の科学研究費補助金などのサポートを受けて、所蔵しているほとんどの圭介の図説を既にデジタル化して、名古屋大学附属図書館のホームページで一般に公開しております。今回のシンポジウムでも、その一部をご紹介します。

今回のシンポジウムでは、単に学者としての業績だけでなく伊藤圭介の人間像にも触れ、シーボルトや尾張藩を中心とした人物交流にわたる種々の講演により、近代博物学とそれを支えた人たちのネットワークを明らかにします。医学を中心とした尾張学の側面も説明されるかと思います。名古屋学があるとして、それを発展させるためには、圭介らの歴史的な役割をまず知ることが重要と考えます。

名古屋大学附属図書館が外部の機関と共催して、シンポジウムを開催するのは、今回が初めてですが、大学の社会貢献の一環として今後もこの種の企画を続けて行きたいと思っております。名古屋大学の構成員だけでなく、市民の方々にもシンポジウムおよび展覧会をお楽しみいただければと思っております。

なお、今回のシンポジウムの開催にあたっては、講師の先生方を始め多くの方々のご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

名古屋大学附属図書館長
教授　**伊藤　義人**

伊藤圭介肖像画　森高雅筆　名古屋市東山植物園所蔵

基調講演

「伊藤圭介と日本の科学のあけぼの」

愛知大学非常勤講師　　**遠藤　正治**

はじめに

伊藤圭介の没後百年に際して、名古屋大学附属図書館の主催によって記念シンポジウムが開かれることは、同館に『錦窠植物図説』が所蔵される点からもまことにふさわしく、快挙といえる。圭介に関心を寄せる全国の研究者・市民が集まり、「伊藤圭介と尾張本草学展」を参観しながら、議論を交わすシンポジウムは、まさに圭介が望んだ博物学の研究方法と合致するものである。

圭介は、江戸末期から明治中期までの一世紀を、日本的本草学の集大成とその近代化への転換に生涯をささげた日本植物分類学の始祖である。その偉業や事歴については、すでに多くの先学の論著によって詳しく伝えられているものゝ、まだ未解明の部分も多い。その評価についても、「明治十二傑」の一人にも数えられ、日本に近代科学を移植した第一人者として高く評価された反面、「幕末洋学者」あるいは、本草学から脱しきれなかった旧式な博物学者との批判もあり、一種の期待ともどかしさの入り交じった複雑な印象を与えている。

圭介の経歴を簡単にたどっておこう。圭介は享和３(1803)年１月27日名古屋呉服町に生まれ、若くして医を学んで町医を開業する傍ら、本草学を志して水谷豊文に就くとともに、長崎に遊学してシーボルト（Siebold, Philipp Franz von, 1796－1866）に学ぶ。帰郷後『泰西本草名疏』を名古屋で出版するが、これはわが国にはじめてリンネ流の近代的植物分類法を紹介するという偉業であり、弱冠27歳のときなされたものであった。今日の植物学用語、綱・目・類（属）・種・雄蕊・雌蕊・花粉・花糸・変種などはこの書の訳語にはじまっているのである。

中年においては蘭方医あるいは蘭学者としての活躍が目立つ。47歳で名古屋ではじめて種痘を実施する。さらに自宅に種痘所を設けるなど尾張藩の種痘普及に中心的役割をはたす。また、上田仲敏とともに洋学館を創設して洋学教授となる。ここに拠って尾張藩の洋学移入を促進し洋学教育を主導するとともに尾張藩寄合医師にも上げられる。

59歳で蕃書調所物産局に出役して、洋書による物産研究をはじめる。維新後は医業を中止し、文部省に勤務して『日本産物志』の編纂など、学制期の博物教育に貢献するが、71歳のとき、東京大学が創設されるとともに理学部員外教授となる。以後84歳で非職となるまで小石川植物園にあって植物の研究に献身する。これによってわが国最初の理学博士号を授与される。明治34（1901）年１月20日98歳の天寿を全うして生涯を終えるが、圭介は、かたわら名古屋医学校の創設にも尽力し、現在の名古屋大学医学部の基礎を築いている。

このように圭介の業績は医学と本草博物学を中心に長年月多岐にわたっているので、圭介の全人的理解のためにはできるだけ様々な領域や視点から検討を加えることが望ましい。圭介の生きた社会は、おもに幕藩制下の時代であり、圭介の人格形成の理解には藩社会や家あるいはその封建的人間関係についての深い理解も欠かせない。また、圭介の絶え間ない近代化への努力が実を結んだのは、シーボルトをはじめ外国人研究者との交流であった。圭介はいかにして海外情報を入手し、あるいは海外との交流をはたしたのであろうか。圭介の海外への影響を解明することも、圭介の役割を理解する上できわめて重要である。

本シンポジウムでは、以上のような視点から、次のテーマにしぼって報告をいただく。

①圭介の日記からみた人間像　　②伊藤圭介と動物　　③圭介の得た対外情報

④シーボルトと圭介　⑤圭介と尾張の洋学　⑥現代植物学からみた圭介の業績

いずれも第一線の研究者による近年の研究成果にもとづく報告であり、討論によっても、従来にない新しい圭介像が描けるものと期待する。

以下に、かつて杉本勳氏によって指摘された圭介の思想上の問題点について、拙論を述べて話題提供としたい。一は、圭介の本業の医学思想の問題で、圭介の学んだ漢方は古方と後世方の折衷医学であったかどうか、また、圭介は漢方をまったく清算した上で蘭方を全面的に受け入れたのかどうかという問題である。二は、圭介の科学思想の問題で、圭介は尾張本草学の高度な成果を集大成した一方、前近代的限界性があったかどうかという問題である。この点については『植物図説雑纂』と『錦窠植物図説』を取り上げて議論を試みることにする。

1. 圭介の漢方と蘭方

圭介は、文化６（1809）年７歳の時から父西山玄道と兄大河内存真について修業し、文政３（1820）年18歳の時、藩の允許を得て、名古屋呉服町に町医として開業する。父玄道の医学の師は、儒医の石川香山と尾張藩医浅井図南であった。兄大河内存真も尾張医学館主浅井貞庵の高弟であった。従って、初期の圭介は父と兄を通じて浅井家の医学の影響を強く受けていたことになる。圭介のこの開業前後の時期のノート類を見ると、浅井貞庵の『傷寒論』や『易経』などの講義録が多数ある。

浅井貞庵は尾張医学館において素問・霊枢・傷寒論・金匱要略や易経などを講義し、春秋２期の藩医の子弟に対する試問においてもこれらの中から必らず出題していた。圭介のような町医の開業試問についても、直接には町方用懸や町在医師取締が担当することになっていたが、やはりこれを統括したのは貞庵であった。圭介が開業試問に際して、貞庵の講義録を熱心に勉強する理由があったのである。

ところで、浅井貞庵の立場は、幕府医学館の考証派の立場とは著しく異なっており、古方を排し後世方を強力に推進するというきわめて特異なものであった。また貞庵はある意味ではきわめて開明的であり、蘭方を学ぶことを認める度量があり、長崎のオランダ通詞系の蘭学者吉雄常庵を懇切に周旋して尾張藩に登用させ、これによって常庵が名古屋で蘭学塾を開塾し、圭介の長崎留学も常庵の世話で行われることになる。

圭介は開業まもなく蘭方への転学を志ざし、文政４年、京都に赴き藤林普山について蘭学を学び、翌５年帰名し、文政６年には吉雄常庵に入門し蘭学を学ぶ。この蘭方修学期のノート類を見ると、蘭書医書の翻訳稿が多く、翻訳に強い関心を寄せていたことが伺われる。

蘭方転学後の文政７年、圭介は友人浅井徳音に送別の辞『与浅井徳音書』をおくる。この『与浅井徳音書』の中で圭介は自らの医学思想を縦横に展開している。

『与浅井徳音書』は、当時の医方を１古方、２後世方、３蘭方の３つに分類している。１の古方医については、素問や霊枢など漢方の古典を軽蔑して、唐宋時代の名医の医論を退けており、傷寒論のごく一部だけを取り上げて「古方」の医論をつくりあげており、「古方」と称しながら、古典を否定しているとして批判し、２の後世方については、素問・霊枢・傷寒論などの漢方の古典にもとづいており、その後の金元医論と合せて、陰陽消長の理論に従って医方を展開しているとして肯定的に評価する一方、後世方の現状は、古典の研究が充分でなく、その治療の実際で目ぼしいところが少なく、明・清の医家の成果を守ることに甘んじていて、著しく内容が貧弱であると批判している。３の蘭方については、「究義観物きわめて條理あり」と、蘭方の背景にある自然科学の方法を高く評価し、「能学にして無謬なり」と断言する。いささか西洋の自然科学を買いかぶりすぎるきらいがあり、かえって当時の圭介がまだ西洋の自然科学について深い知識を持ち合せていなかったかの印象を与える。

『与浅井徳音書』は、自身の遊学体験をもとに蘭方医にも批判を投げかけている。蘭方を安易に施そうとするあまり、漢方の古典を棄て、蘭薬の代薬を求めてこれを強引に投薬するものがあるとして、その危険性を指摘し、当時の医界の医論が互いに衝突していて行き詰まり、

すぐれた指導者が見当たらない。大都会に遊学する書生が多いが、道に迷う状態であることを嘆いている。

圭介の結論は、漢方の古典である素問・霊枢や傷寒論はもとより、唐代の『千金方』『外台秘要』、宋代の『聖済総録』『太平聖恵方』、さらには明･清の「百家の書」も読むことを勧め、さらに和方や蘭方の経験をも参考にせよというものである。まだ22歳の若輩の時の医論ではあるが、蘭方に転学はしたものの、漢方を捨てず、むしろ漢・蘭を広く折衷して実用に宛てようとする立場を高らかに唱っているのである。

圭介の医方の詳細は不明であるが、後年も後世方との折衷の立場をとり、幕末にいたって蘭方中心に転じた形跡がある。

2. 圭介の本草学と植物学　―『植物図説雑纂』と『錦窠植物図説』の世界―

『植物図説雑纂』と『錦窠植物図説』とは、その膨大な分量と豊富な内容からみて圭介の生涯の研究ノートの集大成である。現在の所在は、『植物図説雑纂』は国立国会図書館に271冊、名古屋市東山植物園に４冊の合計275冊が確認されている。『錦窠植物図説』は名古屋大学附属図書館に144冊、国立国会図書館に11冊の合計155冊が知られている。いずれも植物の彩色図と印葉図を多数載せている。特筆すべきは名古屋大学附属図書館本でほぼ全巻がデジタル化され、同館のＨＰでだれでも居ながらにして閲覧できることである。

『植物図説雑纂』と『錦窠植物図説』の違いは、前者が草部の植物を和名のイロハ順にやや未整理に収載しているのに対して、後者が木部の植物を科別に整理して収載している点であるが、収載の方法はほぼ同様であるので、完成度は別として、両者をあわせて圭介の植物研究の集大成的資料集で、彩色図と印葉図による植物図譜とみなすこともできよう。

記事の時代は、圭介が本草研究をはじめた文化文政期から晩年の明治30年頃までにおよぶ。内容が膨大で全容を見るゆとりがないので、圭介が蕃書調所物産方に物産学出役として出仕した文久期（1861～63年）に遣米使節や遣欧使節がもたらした植物をいかに記載したかという点に焦点を当てて検討を試みる。

万延元年の遣米使節は蕃書調所物産方の設立以前であるので、後日使節団随員を訪問して聞取り調査を行っている。その際入手した情報を記録し、（例『錦窠植物図説』01‐128‐018、019）、あるいは入手した種子類を栽培した記録などを多数収載している。

文久２年帰国の遣欧使節には事前に準備があったか、蕃書調所教授方・箕作秋坪らがもたらしたフランス・イギリス・オランダ産種子類約270余品の大半について、洋書調所や自邸で栽培し、その記録を彩色図や印葉図を付して収載し、フランス名・イギリス名・オランダ名および学名など各国語を集め、日本種との比較などを試みている。これらの記載の中には、従来の欧米産植物の渡来時期を塗り替える記載も散見される。従来、この時期の外国産種子類の栽培については、門人の田中芳男の業績のみが伝えられているが、圭介のリーダーシップがあったことが『植物図説雑纂』や『錦窠植物図説』からよく窺われる。

『植物図説雑纂』や『錦窠植物図説』にみられる植物分類の特徴は、まず和名と漢名を挙げ、これに自著『泰西本草名疏』で紹介したリンネ（Linné, Carl von, 1707－1778）の二十四綱法での綱目を記し、さらに自然分類の科名を記すという層状的な記載である。

伝統的な漢名中心主義を改めて和名を中心にイロハ順に配列する方法は、師水谷豊文の『物品識名』がはじめた方法であり、圭介も豊文の方法に忠実に従っている。しかし、開国後は欧米の植物が大量に流入し植物の世界は著しく国際化を遂げた。維新後はとくにサバチエ（Savatier, Paul AL）などと交流を行い、サバチエからイロハ順は国際的でないと批判され、また欧米でのリンネ流人為分類から自然分類への転換の影響も受け、圭介も積極的に採用するのである。しかし、小野蘭山流の日本的本草学の学統の中にあった圭介は、その伝統を否定することはない。欧米の近代科学の成果をも積極的に受け入れ、不断に自らの方法の近代化をはかるとともに、なおも伝統的本草学との調和をはかろうとしているのである。

圭介の決意

名古屋大学附属図書館電子図書館推進委員会委員長
名古屋大学大学院医学研究科教授　　**山内　一信**

（1）　はじめに

本シンポジウムでは７人の講師から伊藤圭介の様々な業績やプロフィルが述べられる。本稿ではコーディネータとしてこれら７人の講師のお話を連携づけ、かつ補完する意味で圭介関連の事績を少し述べてみたい。

圭介の生涯は、当時としては極めて長くかつ活力にあふれたものであり、その業績は、近世から近代にかけての西洋博物学、植物学および蘭学を通しての科学的思考法の導入という役割であった。著者はこれらの活躍の根本は、シーボルトへの師事であり、ここから大きな歩みが始まったと考えている。この長い生涯の中で、エポックとなるべき２つの事柄を中心に述べてみたい。

表１　圭介関係の年表

＊洋学についての圭介日記記載事項

1803	享和３年	名古屋呉服町に生まれる
1820	文政３	名古屋呉服町にて開業
1821	文政４	京・藤林普山（蘭日辞書『訳鍵』の編者）に入門、蘭学を学ぶ
1822	文政５	オランダ医書「解體約説」、「遠西醫範」、「西医書譯稿」を訳す
1823	文政６	吉雄常三に蘭学を学ぶ
1826	文政９	シーボルトに熱田で会見、学問上の知識を交換
1827	文政10	シーボルトに師事、『瓊浦游紀』【東山】を記す
1827	文政10	シーボルトからチェンベリ（Thunberg, Carl Peter, 1743－1828）著書『Flora Japonica』（『日本植物誌』）【国会】をもらい、帰名
1829	文政12	『泰西本草名疏』（賀来佐一郎、シーボルトの校正）【東山】を刊行、尾張藩に献上，おしべ、めしべ、花粉などの名称を創案
1833	天保４	『救荒植物便覧』【蓬左】を刊行、『海獣図説』（大窪昌章とともに）
1838	天保９	木曽へ出張（病用御用として） ＊６月20日シーボルト眼科針について記載
1841	天保12	『啖咭唎国種痘奇書』【蓬左】を著わす。『洋字篇』刊
1848	嘉永元	上田・伊藤で蘭学塾（藩の允許あり）
1850	嘉永３	種痘所を自宅に開く
1852	嘉永５	尾張藩種痘所を開く、石井隆庵、大河内存真、伊藤圭介「取締」
1854	安政元	解剖、圭介「鑑試役」
1859	安政６	洋学所（上田帯刀宅）出仕「惣裁心得」
1861	文久元	蕃書調所物産学出役 文通多く、視野を広げる、尾藩洋学への影響 『舶来草類目録』（大河内構斎選）、旭園で栽培させたかった
1863	文久３	脚気と称して江戸から尾張へ、蕃書調所の厳しい環境、脱出を余儀なくされたか。『暴瀉病手当素人心得書』【蓬左】を著わす 洋学館（上田邸）を自宅に移し、洋学堂と称す
1868	慶応４	＊１月22日、京に上る途中、宿の小児に舎電法謨（セイデンハム：Sydenham, Thomas）を処方 ＊２月８日、御用人より京都・薩摩藩邸でウィリアム・ウィリス（Willis, William）が北越戦争の戦傷者の手術を行うのを見学するべきとの意見をもらっている ＊２月８日、謙児に洋書を教える ＊４月17日、ボードウィン（Bauduin, Antonius Franciscus）とウイリスについて記載あり
1868	明治元年	９月８日明治と改元
1870	明治３	種痘所頭取、病院開業掛『東遊記行』【東山】（４男恭四郎著）
1871	明治４	文部省出仕 その後、 ＊サバチエ（Savatier, Paul AL. 仏人医師・植物研究家）と交流 ＊御雇外国人教師と交流「English Book Beginning，1872」英語学習ノート

1873	明治６	『日本植物図説』（イ部）【東山】、『日本産物誌』（山城、武蔵、近江部）刊行【東山】、ド・カンドル（De Candolle）の自然分科の分類法を採用 ４月文部省編書課勤務、９月とりやめ
1875	明治８年	洋洋社発足、以後『洋洋社談』に33編を投稿 例：33号「救荒植物便覧」、34号「救荒植物便覧続」、41号「オモダカハ毒草ノ説」、42号「烏頭毒説」
1876	明治９	『日本産物誌』（美濃部）【東山】編集 『植物図説雑纂』【国会】（イロハ順に草）
1879	明治12	東京学士会院会員『東京学士会院会員雑誌』に投稿
1881	明治14	『小石川植物園草木目録』賀来飛霞共著や『東京大学小石川植物園草木図説』賀来飛霞共著の編纂
1882	明治15	東京植物学会会員になり、会合に参加し積極的に発言 東京・上野で80歳になったことを祝って「八十賀寿耋筵会（てつえんかい）」
1892	明治25	愛知博物館で90歳を祝って「九十賀寿博物会」が催された
1894	明治27	『錦窠植物図説』【名大】（木部のみ）、「医家先哲追薦会」書幅（順天堂）を揮毫
1901	明治34	１月20日、圭介は98歳で長寿を全う。圭介の死去に伴い、政府は東京大学名誉教授の称号を授け、正四位勲三等に叙するとともに男爵の爵位を与えて、その功績をたたえた

【　】内は原本所蔵機関：名大：名古屋大学附属図書館、東山：東山植物園伊藤圭介記念室、蓬左：蓬左文庫、国会：国立国会図書館

図１　圭介は名古屋呉服町の自宅を質物とし、150両借りた証文（この証文には後欠があるかもしれない）

質物書入申家屋敷之事

一、所は
　呉服町壱町目西側表間口四間半、裏行弐拾間北隣興兵衛扣
　南隣吉右衛門南隣裏行門弐間半通九間三尺余之後地、但壱軒改
　表ニ弐間三間之土蔵一ケ所、弐間三間之附蔵塗込付
右之家屋敷土蔵共質物書入文金百五拾両也借用申所
實正也、当丑二月より寅十二月限　利足は金壱両ニ付一ヶ月銀五分
相極元利共急度返済可致候、万一期月返金及遅滞候ハヽ
右之家屋敷土蔵とも無相違相渡可申候、為其町代
組頭衆奥書印形被致候、為後日書入證文仍而如件

文政十二年丑二月　　伊藤圭介　印
川瀬藤十郎殿
御取次

（２）　シーボルトへの師事と『泰西本草名疏』刊行の決意

圭介の輝かしい業績の第一歩は、シーボルト師事から始まった。彼の業績を中心とした歩みを、表１に年表としてまとめてみた。圭介は文化７年より父西山玄道から本道を修行し、文政３年に二段席町医として壱人立した[1)]。漢方については玄道のみならず、町医の総取締役であった浅井貞庵の影響も強かったと思われる。普通の医者ならば、壱人立して一生を町医として終わっていたかもしれない。圭介は壱人立の後、京の藤林普山に入門し蘭学の基礎を身につけ、尾張では吉雄常三にも入門して蘭学を修めた。さらに『菩多尼訶経』で刺激され西欧への好奇心はますますつのった[2)]。シーボルトが江戸へ参府することを知った圭介はその明晰さと先見の明によって、まずシーボルトへの会見が最重要事項と考えていたに違いない。そのために文政９年シーボルトの江戸参府の機会をとらえシーボルトに宮の熱田で会見し、翌年師事した。

帰郷時シーボルトから与えられたチェンベリ（Thunberg, Carl Peter, 1743－1828）著書『Flora Japonica』は圭介にとっては宝物であり、頭陀袋に入れ肌身離さず持ち歩いたという。この時すでに日本語訳を考えていたのであろうか、その決意と意欲は堅く、328両もの金銭を工面したようである。そのうちの150両は、自宅の屋敷及び土蔵を質物としたものであった（図１、表２）。想像するに、この時の気持ちは、安永３年（1774）前野良沢や杉田玄白らが『解体新書』を翻訳出版したときの気持ちと同じであったような気がする。圭介の強い意思と努力が実って自費により、文政12年『泰西本草名疏』が刊行された。このたび、そ

表２　文政12年の借用金関係

質　　物		借用料金	取次人	借用者
（文政12年正月）				
古渡村辻之門	上畑弐畝弐拾四歩	45両	川瀬藤十郎	伊藤圭介
日置村之内	上畑壱畝五歩	13両	川瀬藤十郎	伊藤圭介
古渡村山之内	７箇所	85両	川瀬藤十郎	伊藤圭介
（文政12年２月）				
呉服町壱丁目家敷	土蔵	150両	川瀬藤十郎	伊藤圭介
計		293両		
（文政12年正月）				
日置村之内更屋敷	上畑壱畝壱歩	35両	川瀬藤十郎	大河内存真
合　計		328両		

の出版費用を捻出したと思われる借用証文が圭介の後裔の一人である伊藤宏氏からの寄贈品の中から見つけ出された（表２）[3]。関連する証文は全部で５通あり、文政12年正月から２月にかけてのもので、『泰西本草名疏』の刊行の直前にあたる。

ちなみに、現在日本に４冊しか残っていない『ターヘルアナトミア』の原本となった『ONTLEEDKUNDIGE TAFFELEN』のうち１冊は圭介が所蔵しており、長崎遊学中に大通詞吉雄権之助から譲り受けたものとされる[5]。

（３）　圭介の名前がついた植物

参考までに圭介の名前がついた植物の代表的なものを表３に示しておく。

表３　圭介の名を学名にした植物

和　　名	科　　名	学　　名
しもばしら	しそ科	Keiskea japonica Miq.
ひかげつつじ	つつじ科	Rhododendron keiskei Miq.
いわちどり	らん科	Amitostigma keiskei Schltr.
いわなんてん	つつじ科	Leucothoe keiskei Miq.
おおびらんじ	なでしこ科	Silene keiskei Miq.
すずらん	ゆり科	Convallaria keiskei Miq.
ゆきわりいちげ	きんぽうげ科	Anemone keiskeana T.Ito.
せりばしおがま	ごまのはぐさ科	Pedicularis keiskei Franch et Savat.
いぬよもぎ	きく科	Artemisia keiskeana Miq.
あぜとうな	きく科	Crepidiastrum keiskeanum Nakai
まるばすみれ	すみれ科	Viola keiskei Miq.

（４）　圭介の医学

圭介は博物学者、本草学者、蘭学者として知られているが、蘭学者、医師としての考え方とか、思想についてはよく知られていない。圭介の医学の出発点は父、西山玄道と兄、大河内存真であり、基本的には漢方であったと思われる。当時、名古屋の町医は浅井医学館の影響が強く、とりわけ当主の浅井貞庵（平之丞）の影響は強かったようである。当時の漢方は古方派（証に基づいて処方）と後世派（病因、病機に基づいて処方）とにわかれていたが、浅井家は古方を嫌い、後世方を推奨したとされる。従って圭介もその影響をうけていたと思われるが、後世方にはある程度距離をおいてみていたという[4]。ここで大切なことは、当時の浅井医学館は漢方主体、漢方固執であったが、平之丞は蘭学を容認していたようで、このために名古屋での洋学がある程度発展し、また圭介の蘭学修学にも問題はなかったようである。

圭介の医学での[5]の貢献をあげれば、『喫咭唎国種痘奇書』を天保12年（1841）に著し、さらに尾張藩種痘所を嘉永５年（1852）に広小路大津町西に開いて、種痘知識の啓蒙普及に努めたことである。文久３年にはコレラへの心得書、『暴瀉病手当素人心得書』を著わし、その

対処に努めた。幕末期、尾張藩の洋学普及についても尾藩上級藩士、上田仲敏らを助けて上田邸内の蘭学塾の教育・運営にたずさわった。この蘭学塾は後に藩営の洋学所、洋学館に発展するが、仲敏の死去とともに、圭介は洋学堂として自宅に移した。この洋学堂は軍事や化学の領域を牽引することはできなかったが、医学、本草学の拠点のひとつとしての地位を占めた。

図２　慶応４年８月２日の圭介日記
ローマ字混じりで、「ki（帰）後断然決意 TiSi（致仕）、楽余年也、帰療願熟考の事」と記載されている。

蘭方医としての影響は天保９年６月20日木曾谷への出張中シーボルト眼科針について依頼をしているころからも明らかなように、シーボルト入門の影響が見られる。慶応４年１月22日には京に上る途中、宿の小児に舎電法謨（セイデンハム）を処方した。セイデンハムは17世紀のイギリスの医師、セイデンハムが発明した芳香阿片酒でシーボルトにより伝えられたものという。その後、西洋医学との関係については『圭介日記第三集』にあるように、慶応４年（1868）２月８日、御用人より京都・薩摩藩邸でウィリアム・ウィリスが北越戦争の戦傷者の手術を行うので見学するべきとの意見をもらっている。

明治維新後は明治３年（1870）、名古屋大学の前身である仮医学校、仮病院の設立の建議書に石井隆庵、中島三伯とともに名前を連ね、医学校、病院設立に貢献した。

（５）　尾張藩致仕

慶応４年正月、圭介は徳川義宜に随行し、戊辰戦争中の京都の警護に医師としてあたった。このときの勤務は単々とした毎日で、見舞や往診が終った後は、京の町を散策し、植物を採取したり、好きな書画や学術書、さらには骨董品を買い求めている。この時の状態がきついとか危険ということは診察した患者数や行動からみても考えられないし、身分は奥医師見習というれっきとした藩医であり、経済状態も悪いとは思われない。こういう生活が却ってストレスであったのか、過重であったのか、あるいは結局のところ、向いていなかったのかもしれない。突然、８月２日の日記に「ki（帰）後断然決意 TiSi（致仕）、楽余年也、帰療願熟考の事」と記載されている。７月20日の微邪を患っているので、それを契機としてか、あるいは何らかの事情で休みたくなったようである（図２）[6]。主観的考えや想いについては全くといっていいほど記載しない圭介がこのように書いたことはよほど気に入らないことがあったのかもしれない。

圭介は本来、学者肩の人物であり、書物を書いたり読んだり、あるいは研究することに興味はあっても、堅苦しい役所勤めや、いわゆる日常診療に単々と従事することには向いていなかったのかもしれない。つまり、町の開業医のように毎日、決まったように外来診療することも、また藩医として堅苦しい役所勤めをし、栄達を望むよりも、医学者としての道を貫きたかったように思われる。この決意により、明治維新時には、尾張藩士というよりも、学者としての自立の道を選んだようである。

この８月２日の決意が無かったならば、その後は別の方向に向かっていたのかもしれない。維新後は学者としての道を歩み、東京大学で教授に就任し、理学博士第一号を授けられ、見事に自分の道を貫いたことになった。明治維新時、藩の重要な地位にあった者は、結局明治政府の役人に潰されることが多かったようであるが、圭介の場合、学者としての自由な身であったためか、明治政府の文部省に雇われることとなり、その後博物学者と発展し、理学博士の栄誉に浴することになった。

（6） おわりに

圭介の業績を表に示して概観した。何と言ってもこの経歴の中での重要事項はシーボルトへの師事であり、『泰西本草名疏』の刊行であり、維新後学者として自立の身を貫いたことであろう。その決意の強さと実行力があって理学博士伊藤圭介があった。

引用文献

1）山内一信：統計的にみた天保期名古屋の医師像、日本医史学雑誌36(4)：379-400, 1990.
2）木村陽二郎：伊藤圭介「泰西本草名疏」解説、1-13、井上書店、東京、1976.
3）横山　進：伊藤家寄贈の圭介史料について。伊藤圭介日記（第七集）出版記念会、平成13年４月30日、名古屋。
4）遠藤正治：伊藤圭介の医学思想をめぐって、現代医学48(2)：431-433, 2000.
5）山内一信：西洋医学と伊藤圭介、伊藤圭介日記第６集、錦窠翁日記121-128, 2000.
6）山内一信：幕末の戦争と尾張藩医師、伊藤圭介日記第４集、錦窠翁日記161-169, 1998.

圭介の日記からみた人間像

静岡文化芸術大学教授　　**岩崎　鐵志**

（1）「日記遣ス」

人の話頭にのぼる情報というものには噂という部分があって、根も葉もないものから、火のない所には煙は立たないものまで、人の口には戸は立たないものであり、当然ながら危うさが潜んでいるであろう。それがかえって他方では、口にしたり口にされたりする、その人間の真実を垣間見せてくれる瞬間でもあろう。この虚実の二つながらを知りたく、また人に知られたく意識して、広く提供しようとするものが人名録と呼ばれる各種の刷り物であり、評判記や番付の出版である。このジャンルの本質は、近世以来、今日においても不変である。

すなわち、人の心における不易流行の相には、中国春秋時代の諸国の歴史を記した『国語』にいう「衆心成城、衆口鑠金」という認識、つまり、多くの人が気持ちを一致させれば城の如く堅固になり、多くの人が話す言葉、伝える噂、囃し立てる評判は堅い金も溶かしてしまう、という事があるからこそ、等身大の情報を自ら進んで提供する事に越したことはないという自覚が生まれる。特に人名録の場合には、入花料（掲載料）を払ってまでも掲載するわけであるから、得意とする専門分野の項目を挙げる事により、自己実現を果たすことになる。これによって可能性としては当該人の意図は正しく発せられる事になり、まずは「衆口鑠金」の端緒の危うさは回避されようか。

情報の交流と授受によって成立する人間関係は、師弟関係という縦の関係とは別に、身分や地域を越えた横の関係が生まれる可能性がある。その場合は知識や技術という情報を共有する事による一体感に結ばれることになる。

伝達手段が限られた近世においては、自覚された情報発信の一つに書状発給という行為がある。とりわけ遠隔地の家族や知友に書状を送るという行為は日常的な事である。

伊藤圭介の場合も例に漏れず、生涯にどれほど多くの書状が出されたのか、想像を絶しよう。というのも、幸いにかなりの自筆日記も残されており、それには書状発給の際の下書きが残されているからである。

これに至るまでには、子孫による公開と保存への熱意と、先学研究者や受託機関の配慮があって、今日まで良好な状態で残されているのである。したがって書状原本は無くても、日記によって検する事が可能である事は、これまで伊藤圭介文書研究会が刊行してきた幕末維新期と明治初年の日記によって明らかであろう。

本研究会はこれまで八冊の日記を刊行してきたが、そのうちの文久二年の江戸滞在中の日記には、それまでの翻刻作業では例を見ない記事があるのである。すなわちそれは、自らの日記の何日か分をまとめて複本を作り、江戸から名古屋に「日記遣ス」という簡潔な記事である。この記事をどのように読むか、それを本稿の課題としたい。

情報の交換という観点から見ると、江戸居住の伊藤圭介から名古屋に残してきた家族や尾張甞百社の知友に宛てて書状を発するのは普通の情報交流の事であるから、特異な行為ではない。しかし、圭介が江戸から名古屋に自らの日記を送るという行為の意味は何か。

それは圭介の資質もさりながら、文久一年九月から文久三年十二月までの、途中に賜暇休暇を挟むけれども、蕃書調所出役による江戸滞在事情がもたらすものではないかと思われる。圭介にとって名古屋に残してきた家族の「衆心成城」を図り、出自身分がつきまとう時代にあって、しかも藩庁内の権力闘争に距離を置きながらも、藩庁役人や門人知友などの交遊圏から発し、人々の口に上る噂という破壊力、その「衆口鑠金」を回避するための防御と攻撃

の方法として、この行為は十分に機能していたものと思われる。

（2） 文久期尾張藩政局の顛末

伊藤圭介の出自は町医者であり、安政六年（1859）六月、寄合医師（七人扶持）に処遇されたが、町宅して医療活動は従来通りに行われていた。時あたかも前年の安政五年六月、日米和親通商条約の無断調印に関して、十四代尾張藩主徳川慶恕（慶勝）は水戸藩徳川斉昭らと共に不時登城して大老井伊直弼を難詰した。他方、将軍家定継嗣問題で井伊等と対立していた事とも相まって、幕府はその処罰として慶恕の隠居謹慎を命じた。これにより藩主は慶恕（以後は慶勝と表記する）の実弟（高須藩松平家）茂徳が、十五代尾張本藩を継承した。当然ながら茂徳は井伊路線に沿っているわけである。

これより前、慶勝の藩主就任以前には、十一代斉温（将軍家斉の実子）、十二代斉荘（将軍家斉の実子）、十三代慶臧（田安徳川斉匡の実子）というように、幕府からの押しつけ養子による藩主が続いていたので、慶勝は衆望を担って支藩高須藩からの就任であった。それ故に藩政改革の遂行が可能であったが、抗争の火種は温存される事となった。その上、先の慶勝隠居謹慎を承けての茂徳の就任以後、井伊路線に基づいて政局は再度反転し、藩内抗争が潜行した。しかのみならず万延元年三月の井伊暗殺事件の後、慶勝は赦免され、政治活動を再開したので、これ以後、幕府権力を介在させた、いわゆる一藩二主という、封建的主従関係における最悪の権力闘争による政局が顕在化する。この闘争の妥協点が文久三年九月、慶勝の実子の義宜（六歳）が十六代藩主を継ぐ事であり、茂徳は隠居し玄同と称する事になる。ここにおいて当然ながら慶勝の藩政掌握が実現する。（この項は岸野俊彦氏からの御教示による。）

以上のような尾張藩政における権力闘争の推移を認識しておく事が、本稿の主題である文久期の伊藤圭介の心情と行動、つまり、自己実現の道程を理解する一助たりえようか。

（3） 蕃書調所出役まで

このことについては既に吉川芳秋氏による史料研究、杉本勲氏の論考『近世実学史の研究』や伝記『伊藤圭介』があり、また近年では『伊藤圭介日記第三集』の発刊に際しての本研究会の定期講演会の席上、土井康弘氏によって「蕃書調所出役期の伊藤圭介」という研究発表がなされているので、この項はそれらに拠る事にする。

周知のように安政元年（1854）以降の西欧諸国との和親条約締結に伴い、軍事技術と外交処理の課題を解決すべく、安政三年二月、九段坂下に蕃書調所が設立された。初め将軍直参を対象にしたが、安政五年には陪臣の入学も許可され、万延元年（1860）から文久二年（1862）にかけて学科新設がなされている。

文久元年四月、初代頭取古賀謹一郎は勝麟太郎と連署して物産学の新設と「其学巧者成者両三人出役」を建議した。外国貿易に備えて「御国地内之産物」である「動植金石類」の標本収集と品質鑑定を図るものである。

この建議書を承けて四月十二日、教授の箕作阮甫は伊藤圭介推挙が古賀謹一郎の意図から出た事を言明した上で、圭介に向けて蕃書調所出役への就任意志を問う書状を送った。この圭介打診の契機は、シーボルトが安政六年七月長崎に再来し、四月には横浜に到着した事にある。書状内容はシーボルトの質問に答えられる本草学者が蕃書調所教授陣にいないことを述べ、出役期間中の地位、職務と出入扶持の条件を示している。圭介の待遇が出役というのは、尾張藩に本貫の籍を置く非常勤勤務であり、手当は二十人扶持、かつ江戸勤務、という条件である。圭介の気持ちを誘うにあたり、阮甫は本文でシーボルトとの再会の益を指摘し、追伸では両者相識の千村五郎が、現在蕃書調所で勉学中である事に言及している。

他方、圭介が迫られた経済的条件にも言及する。名古屋におけるような寄合医師としての職務の他に、町宅による診療収入のごときを、江戸では期待できないであろうという。

おしなべて町宅している藩医の収入はその家禄とは別に、他藩の出入扶持や富裕な庶民を診療する事にあった。それは杉田玄白日記の例で明らかである。

圭介は町医者時代以来、袋丁、七間丁、馬丁、伊勢丁に家作を構えて借家に出し、そのうえ新たに鍋屋丁に家作を構え、その所有者名義を娘の梅にするという意図を持つものの、寄合医師という身分上の難点に逢着している（四月十七日条）。圭介にはこれ程に財力があり、利殖才覚があった。しかるが故に、阮甫が江戸では公務以外の収入がないという示唆を如何に聞き取ったか、関心が持たれよう。事実、圭介は尾張藩戸山屋敷に居住したので、日記中には屋敷居住者の診察記事が多い。しかし、四月六日条に記された上野居住の町人の梅毒診療を相談されている様な例も無いわけではないが、公務以外の診療活動が激減した事は、阮甫の予測通りのようである。

文久元年十月十三日、圭介は名古屋出立の「旅装紛擾中」に、従者の謙三郎や弟子達に向けて、一つ書きに起こした全二十二箇条の旅行心得を示した。この総論には「各紀行日記ヲ作リ、ソノ初、左ノケ条ヲ記スベシ」とある。紀行文や日記の作成は本草学者としての圭介自身の身に付いた学問的方法論の延長であろうし、師弟関係にもそれを貫徹せしめていることがわかる。この旅行中の心得二十一箇条分は実際に即して細やかに身を律する事を教えている。江戸滞在中の厳禁項目が一箇条ある。それは火事見物と喧嘩の立ち見を厳に戒めている事である。この箇条をここに収めたのは江戸滞在とても旅行中という認識であろうか。（都立中央図書館渡辺刀水文庫蔵、前記土井氏の講演史料参照）。

また、この総論にいう日記作成を前提にした文通が、後述のように、圭介にとっては江戸と名古屋留守宅を結ぶ生命線である事がわかる。

（4） 圭介の腐心

本稿冒頭に記したように、圭介は数日分の日記複本を作成し名古屋に送付している。すなわち、管見では現存する文久二年の場合、「日記遣ス」という送付記事が四月十二日条から六月二十七日条までの間、十一回見える（四月十二日条、同十七日条、同二十二日条、五月二日条、同七日条、同十二日条、同二十七日条、六月二日条、同十二日条、同二十二日条、同二十七日条）。もっとも、七月十六日条から七月二十四日条までは日記記載が無い。それは日本全土に蔓延した麻疹の流行が藩邸戸山屋敷をも襲い、倅謙三郎や弟子の鈴木容庵、横江八百太郎、田中芳男が重症となり、後の女婿中野延吉などは瀕死状態に至っている。それ故圭介は七月二十五日の直前の行に、「此節家内之病人并世間之病用等多用ニテ、日記を認候暇とてはなし」と記している。診療に奔走している事が推察される。

この文久二年度の日記の記載は、これ以後、七月二十五日、二十六日、二十七日の三日間は天候記事に終始し、次に日条が飛んで八月二十二日条から八月二十八日条までの間の記載をもって終了している。

これまで刊行された圭介日記、すなわち文政十年の長崎旅行、天保九年の木曽出張、慶応四年の京都滞在日記などを見る限りにおいて、旅行中の圭介が日記複本を名古屋留守宅に送るという記事は見あたらない。それほどにこの記事は特異なものと思われるが、この日記複本は現存していない。しかしながら、内容は推定できる。江戸の戸山屋敷での見聞や診療活動、蕃書調所での研究状況や交友関係、謙三郎や弟子達の教育環境や麻疹罹患と快癒、花見の行楽や探訪記事などが日記原本には記載されているから、たとえ抄録としても、それらが内容となろう。江戸での特に重要な体験はシーボルトとの再会であろう。その一件は日記複本によっても名古屋へ伝達されたものであろうが、圭介はシーボルトからの書簡自体を名古屋へ回覧している程である（文久二年四月朔日条）。

圭介の江戸滞在日記には花見遊楽に及んでも、先の木曽旅行に見えるような漢詩を賦した気配が無い。それに類似した状況としては、せいぜい四月二十日条と六月十四日条の、子規の記事である。しかし、しきりに鳴く子規に感興を催しながらも、それを漢詩に昇華させず、

後者の日条では次のように、詞書を付けた狂歌を記している程度である。

子規至今不断声、又ハ聞飽きタリ、ほとゝきす自由自在にきく里ハ酒屋へ三里豆腐やへ五里、の歌もあたらす、夜も昼も飛てもとまりてもなくなり

自由なり都ハ酒や豆腐やの屋根にもとまり子規なく

右によれば上五句「自由なり」の句の意味は興味深い。子規を聞くのは人里離れた草深い場所であると思っていたが、今や都会生活の中で聞かれるものであると詠う。江戸の生活を満喫している圭介の自画像とみる事も可能であろう。何ものにも囚われず自己実現を果たした姿がみられようか。

というのも、この翌年の文久三年正月二十七日付けで留守宅の妻宛に送った書状中には江戸生活の一面、充足した研究生活が述べられている。その主旨は、遠藤正治氏の御指摘もあったが、幕府御用を勤めて扶持米を宛われ、「その勤めも手前のすきの事を致すもの」であり、「仲まつき合のめんどうもなく」という生活は、江戸の学者仲間からの羨望の的であるというのである。江戸での研究生活に限ってみれば、これこそが「自由なり」という感慨の内容であろう。

しかしながら、子規を記した日条の直前、文久二年六月十二日条には、留守宅が直面している情報に接して、第三者に「極成丈早く帰国いたし度」と記した事を、妻に読ませている点が重要である。帰国の意思を披瀝した直後に示した「自由なり」という感興は、翻ってみて思い屈するところがある心境を吐露しているとも考えられよう。

圭介をして思い屈する様に追い込んでしまった名古屋留守宅の状況とは、どのようなものか。妻からの情報内容は、圭介が指示した対応策から判断できるわけであるが、日記に記された内容を項目化して挙げれば、子女の教育（恭四郎の素読師匠の選択、手紙を書く事が手習いであるとした梅への教訓、四月朔日条、同二十七日条）、妻への家計簿作成指示（四月十七日条）、家賃徴収の催促方法、新たな家作の名義人問題、旭園の管理問題等である。

留守宅の妻を悩ませ、江戸の圭介に切歯扼腕させる問題の最たるものは、家賃滞納問題である。六月十二日条には次の例が記されている。数ある貸家のうちでも七軒丁の近江屋は悪質である。家賃滞納の上に、妻へ二十両の借金を申し込んだのである。その対応策として圭介は六月十二日付けの返書を送った。その際に圭介はまず返書を妻に読ませ、この返書を妻自身が封じて近江屋に渡すという段取りを指示した。すなわち、「此近江やへ之返書ニて一見よミて封をして持セ可遣候」とした。その返書の内容は、江戸と名古屋との「両地之住居ニていろいろもの入多く、こなた之御扶持ニて十分ニ此方くらしいたし候へ共、留守宅ハ家ちんをあてニいたし、取つゞき候故、中々外之者へ之有余御座なく候、極成丈早く帰国いたし度、先家之家ちんも行々相違なく留守宅へ御渡可被下候」とある。

先に妻に返書を読ませるという事の意味は重要である。人心一致を図り、「衆心成城」の実を挙げる方法である。日記複本を送るという圭介の意図もそこにあるといえる。

次に旭園の管理問題を示そう。尾張甞百社を主宰する圭介の研究拠点である旭園は、圭介の江戸生活の間、名古屋の研究仲間に貸していた。しかしながら、管理の観点からみると、植栽の手入れ、家屋の火の用心、甞百社開催に必要な「日用代」の問題などがある。

圭介が旭園をもはや貸さないという考えを示し、八月二十二日条に、旭園貸与は今年限りと言ったのは、次の事情があった。八月二十七日条によると、圭介が諸雑費日用代を負担するから是非旭園を使用して甞百社を開催してほしいと言ったとして、借用者側が圭介の意志を故意に曲解して流言を飛ばしたからである。結論として、「旭園の為ニハ本草会無キ方よろしきかと存候」とした。ただし、今年中は貸さないと義理が立たないから貸してもよいと言い、その際の諸雑費は負担してもよいと譲歩しているが、以上は大河内存真と構斎宛の書状下書きに見えることであり、これまた八月二十二日条からみると、日記複本を送る事から、妻にも読ませる意図もあるものと思われる。

この旭園貸与一件からみてもわかるように、心ない流言飛語を為にする者達が存在する事

から、「衆口鑠金」を防御する積極的な方法として、情報公開があるわけで、留守宅に書状を送り、日記をある期間分を送る事も有効であったものと思われる。つまり、圭介は妻の口から漏れて伝わる事を意識に入れて、名古屋留守宅を取り巻く人々に対して、知ってもらいたい事を知らせる、という情報操作をしているとも解せられよう。

（5） 帰国の意思

文久三年正月二十七日付けの妻宛の書状中には、充実した江戸での研究生活を伝えている事は、先に見た通りであるが、同時に留守宅を心配する愛情が吐露されている。江戸と名古屋、研究と家庭、いわばアンビバレントな心情に揺れている書状である。帰国へ向けての傾斜は既に文久二年六月十二日条で滞納家賃の支払催促の書状中に見えている事を示したが、留守宅の妻に対する近江屋の強引な態度に向けて、威嚇する意味もあったように読みとれるが、帰国の意思の表明である事には変わりない。帰国への段取りが具体性を帯びて判明するのは、土井氏の御教示による渡辺刀水文庫蔵の圭介の願書である。

すなわち、文久三年六月の年紀をもつものであるが、宛所の記事は無い。内容からみて蕃書調所宛であろう事は推察される。これによると、文久三年三月晦日、圭介は妻の看病を理由に「五十日之御暇」を貰って江戸を発ち、四月十一日に名古屋に到着した。妻の病状は勝れず、圭介も脚気を煩ったので、「猶又五十日之御暇日延」を願っている。そのうえ六月になっても脚気が治癒しないので、出役を罷免してほしいという。願書の記事からみると少なくとも最初の暇願いの提出期日は文久三年一月、二月の頃であろう。さすれば杉本氏の引用する文久三年正月二十七日付け書状で言う、「内の事のみ苦ニ相成候ゆへ、何れ都合をして病気にても申立、甚残念なれども無是非帰国いたし度」という計画を実行した事になる。杉本氏の年表では十二月に帰国とあるが、願書提出の六月以降、十二月までの間に、江戸に戻っていたかどうか不明である。

帰国を実行した原因として妻の看病や圭介の病気を真正面から挙げる事には無理がある。それならば何が契機となって圭介は決断したのか。推測の域を出ないのであるが、尾張藩政局の権力闘争、一藩二主体制と無関係ではないと推測するのである。情報が他に圧倒して集積する江戸、しかも、蕃書調所に出役する事は、圭介には洋学研究上の利点たりえたと思われるからである。

江戸で洋学研究を遂行するにあたっての条件は、『蘭学事始』時代以来、さして変わらない事と思われる。杉田玄白は『蘭学事始』の中で、病身、夭折、生活苦によって蘭学学習を継続し得なかった人々に対しても哀惜の念を込めて言及している。他方、大槻玄沢のような「江戸永住の人」となった例の対極にあるのが、自己都合からではなく、「官途につながれ」て、参勤交代の主君に扈従するために勉学を放棄せざるをえなかった者である。

これとは位相が異なるが、圭介の帰国決意を自己都合と断定する事は躊躇される。というのも既述のように、万延元年九月の前藩主慶勝の幽閉解除に続いて、文久二年の慶勝の謹慎解除以来、文久三年九月の義宜の藩主就任まで、尾張藩では藩主茂徳と慶勝の二派閥に分かれた暗闘があり、圭介とても無関心では済まされない時期に相当していた。本貫の地が尾張藩医である以上、これを意識せざるを得ない事、それもつまりは「官途につながれ」ているからである。すなわち、杉本氏が引用する文久三年正月二十七日付け書状の中では、「いくさが初まりても何がおこりても、時節の事なれば夫もあんじ不申、此節世間やかましくても、夫も平気也」と、一向に意に介さない事をのべているが、圭介の真意は果たしてその通りであろうか。この発言は藩庁内の緊張、外国船の砲撃、幕閣襲撃事件等を踏まえての言及であろうが、達観した考えを述べているように見える。しかし、近世主従制度における御恩に対する奉公の倫理の観点からみると、圭介の右の発言は成立しないはずである。したがって、暗闘裡に何れの陣営に与するか、旗幟鮮明が求められている可能性があったわけで、暗々裏に身の処し方を考え急迫事態を避けてきたという自意識が吐露されているのであろう。なぜ

それが実現できたのか。それは実に圭介の出自と職業という、封建制下の身分に関わる事に起因するものと思われる。すなわち、圭介の出自は町人身分の医者であり、医者もまた僧侶に代表されるような封建制下の身分としては「方外之士」である。この歴史的性格を有する故に自ら望めば中立的立場を保持できたであろうし、重宝がられたものと思われる。その上、出自が町人故に政治参画するには遠い存在である。

他方、名古屋の生活においては甞百社という身分を越えた結社の盟主であるから、先にみた旗幟鮮明を迫られる事態に備えて、悪質な流言による「衆口鑠金」を防ぐ為にも、妻や大河内存真、構斎などに読ませ、何れ漏れるであろう源を限定すべく、「日記遣ス」方策を編み出したものであろうし、これが即、名古屋留守宅の人々を「衆心成城」に帰一させる方策でもある。

この様にみてくると、杉本勲氏の言うように、「政治的には比較的無関心な実学者の典型的な姿」というのみでは、不十分のように見受けられるのである。自己実現を図り、圭介自身と家族を保守するために、主体的な選択をしている底意を感ずるのである。

伊藤圭介と動物

名古屋大学博物館教授　**西川　輝昭**

（1） はじめに

ホヤ類やヒル類などの分類学者として、また進化論関係の多数の著述で有名な丘浅次郎は、日本初の網羅的な動物図鑑である『日本動物図鑑』（北隆館，1927年刊）の序文において、「理科方面の学科は多くは明治維新後ににわかに輸入せられ、特に動物学のごときはその前にはほとんど何もなかった」と記している（現代的表記に改めた）。つまり、日本の伝統的な本草学・博物学と近代的動物学との間には深い断絶があったとの見解であり、それは現在広く認められているようである。動物分類学にたずさわり、日本列島に生息する生物の人間による認識・記載史に関心をもつ私にとっては、この「断絶」の実態解明は避けられない課題である。

植物分類学の泰斗牧野富太郎（1941）が、「本草学の大家として……大海の中に毅然として立った島……として棹尾の勇を大いに奮われた」とその晩年を評した伊藤圭介は、この課題にとって最も重要な人物といえよう。このようなわけで、圭介が書きため孫の篤太郎による部分的増補も経て今日に伝わる、動物に関する未刊の稿本類を細々ながら調べてきた。そこで出会った「蝦夷フレチ説」を中心として、圭介と動物とのかかわりのほんの一端を紹介したい。なお、内容の一部は西川（1995）と重複することをお断りしておきたい。

（2）「蝦夷フレチ説」

国立国会図書館蔵『錦窠魚譜』の巻号不明の一冊（登録番号：別11-11-17）に、「蝦夷フレチ説」と題され、末尾に「文久壬［1862年］冬日錦窠伊藤圭介識於市谷邸舎」と記された一章がある。草稿とその清書からなり、いずれも冒頭に、「蝦夷舎利浜ニテ寒風暴波ノ候赤色蚯蚓［ミミズ］ノ如キ物ヲ海岸ニ打揚ル事アリ此品方言フレチト称ス……多気志楼主人ソノ乾腊ノ品ヲ余ニ贈レリ……」と記されている。乾燥標本の図も添えられ「長七寸」（約21㎝）との書き込みがある。多気志楼主人とは、伊勢出身で「北海道」の命名者として知られる探検家松浦武四郎のことである。

続くページにある伊藤篤太郎による1940年のメモに示唆され松浦の『戊午知床日誌』をひもとくと、1858（安政５）年初夏の知床半島踏査中に発見した「フレチ」の正体について、松浦は何人かに問い合わせていたことがわかる。『日誌』には阿部喜任、山本錫夫（京都の著名な本草家で松浦の師山本亡羊の二男）、および圭介の回答が紹介されているが、ここから明らかに、上記「蝦夷フレチ説」は松浦への回答の草稿と控えであろう。

松浦によれば、「フレ」は赤い、「チ」は腸のことで、魚の腸に似ているためである（しかし、更科・更科（1976）は「チ」の別義を挙げてこれに反論している）。地元では干して「腎薬」（滋養強壮剤）として使うという。フレチがよくうち上がることから「フレチウシ」という地名が出来たとするが、この場所は「現在のウトロに近い、オシンコタンの滝の近く」にあるという（更科・更科，前掲）。

幕末江戸の著名な博物学者である阿部喜任の回答は、羽田あたりの漁師さんがヒラメ釣りの餌にする「和名為（い）」、つまり、現在、ユムシ動物門の１種に分類されているユムシであろうとした。

一方圭介は、ユムシとは「其形稍異ナリ是ヲ以テフレチニ充ルハ妥ナラズ」として「ウミミミズ」（イソメやゴカイの仲間、環形動物門多毛類を指すらしい）に最も近いものとした。

（3） フレチはユムシ

フレチの正体は何か。北海道立網走水産試験場の来原康裕氏のご教示によれば、道北稚内周辺では時化の後に長さ20㎝ ほどのユムシが大量に浜にうち上がり、これを現在でも地元では「フレチ」、「フレッチ」、「フレツ」あるいは「フレッツ」と呼んで食用にするという。ここから判断する限り、圭介よりは阿部の鑑定に軍配が上がりそうである。

フレチの正体と思われるユムシは、平安時代以来「い」（幕末になって「ゆ」とも）と呼ばれ、釣り餌や食料として親しまれてきた海の動物である（西川，1995）。日本列島の他、朝鮮半島とロシアのそれぞれ日本海沿岸、および中国山東半島にも生息している。近代動物分類学における認知、すなわち世界共通の学術的命名（＝学名の創設）は、オーストリア人 Richard von Drasche によって1881年になされた。*Echiurus unicinctus* というのがその学名で、名古屋大学医学部の基礎を築いたオーストリア人医学者ローレツ（Albrecht von Roretz）が「南日本の東岸」で採集してウィーンの王立博物館に送った２個体に基づいている（Drasche, 1881）。この標本（シンタイプ）は現在もウィーン自然史博物館に保管されており、私も今春、名古屋大学学術研究基金の援助を得て行った標本調査で、それを確認した。なお、本種の学名は、その後 *Urechis* という新しい属が1908年に提唱されたのにともない、*Urechis unicinctus* と変更されている。

ところで、東京大学総合研究博物館には、日本における近代動物分類学の草分け時代の標本の一部がかろうじて残されている。ユムシの液浸標本も数本あるが、そのひとつ、池田岩治（後の京都帝大教授）が瀬戸内海で1882年７月に採集した標本に、*Echiurus* の仲間の新属新種であろうという趣旨の英文メモが添えられていた（西川，未発表）。しかしこのメモを書いてから間もなく、池田は Drasche が一足早く1881年にすでに新種として発表していたことをおそらく該当論文の掲載誌によって知ったはずである。その標本びんに貼られたラベルには、*Echiurus unicinctus* Drasche と書きつけられ、小さなドラマの終末を示している。日本列島にすむ動物の名付け親にその住人自身がなるには、あとしばらくの時間が必要だったのである。

（4） ハヲリノヒモからホシムシへ

「蝦夷フレチ説」にもどると、圭介は彼の「ウミミミズ」の１種として、漁師さんが鯛釣りの餌に使う「ハヲリノヒモ」にも言及している。名古屋大学附属図書館蔵の『錦窠蟲譜』第６巻には、「ハヲリノヒモ……全身淡褐色頭少シ黒キ帯フ髭ノ如キモノアリ……竪横粗キスジアリ蚯蚓［ミミズ］ノ如シ漁人是ヲ採テ鯛ヲ釣ルエサト為ス……知多郡海中泥ニ居ル穀雨ノ節又日庵ヨリ来ル」として図が添えられている。これはたぶんスジホシムシ *Sipunculus nudus* かスジホシムシモドキ *Siphonosoma cumanense* のことと思われる。引用文中の「又日庵」は、尾張藩の国家老をつとめた渡辺又日庵（ゆうじつあん）ではなかろうか（その略歴は吉川（1993）を参照のこと）。

引用したとおり、標本の記載は簡単で外部の特徴に留まり、大きさにも言及がない（描画が原寸大ということかもしれない）。内部形態を調べた形跡がないことに、磯野（1989）が指摘した江戸本草学の弱点が現れている。なお、上記の図とうりふたつのものが、尾張の本草家吉田高憲の『吉田平九郎稿蟲譜』（国立国会図書館蔵，7-178）にある。後者には解説文がまったく付されていないから、原図は前者であって吉田のはそれを模写したものと想像されるが，詳細は今後の分析に譲る。

ともあれ、この動物は現在、星口動物門に分類され、この門に属する動物はホシムシ（星虫）類と総称される。これら和名のおこりは、口の周辺にはえる触手（上記の「髭ノ如キモノ」はこれを指すか）を星にみたてたドイツ語の Sternwürmer の直訳らしい。しかし，スジホシムシやスジホシムシモドキの大きさ、形、あるいは縦横に走る筋肉によって体表が四角の小部分に分けられている様子は、太い糸で織られた“羽織の紐”がぴったりである。これ

が和名として生かされなかったのが惜しまれる。

（5） おわりに

伊藤圭介をはじめ江戸から明治の本草家がのこした動物関係の大量の稿本類は、標本が伴っていないという欠陥をもちつつも、現代的なさまざまな観点からの活用を待っている。データベース化などを含めて、調査研究の進展を願ってやまない。

引用文献

Drasche, R. von 1881 Ueber eine neue *Echiurus* -Art aus Japan nebst Bemerkungen über *Thalassema erythrogrammon* S. Leukart von der Insel Bourbon. Verhandl. k.-k. zool.-bot. Ges. Wien 30: 621-628.

磯野直秀 1989 日本の博物学、 慶応義塾大学日吉紀要、自然科学7:18-29.

牧野富太郎 1941 伊藤圭介先生、無閑之（むかし） 48:3-7.
（「続」が49号 pp. 4-8と50号 pp. 4-6に掲載されて完結）

西川輝昭 1995 ユムシ・イムシのルーツを訪ねて―動物和名の一考察、海洋と生物 17:512-517.

更科源蔵・更科光 1976 コタン生物記Ⅱ. 法政大学出版局、東京。

吉川芳秋 1993 医学・洋学・本草学者の研究、八坂書房、東京。

圭介の得た対外情報

東京大学先端科学技術研究センター協力研究員　　土井　康弘

（1） はじめに

幕末に頻繁に日本沿岸に接近する西欧列国から自国を防衛するため、幕府や諸藩は積極的に西洋兵学ならびに海外の事情を研究するようになる。これにより洋学研究の主体が医学から兵学に移行していくが、開国以前研究を遂行するにはオランダ語の読解能力を有する蘭法医の力を借りる必要があった。尾張藩も例外でなく伊藤圭介が弘化４（1847）年御用人支配医師となった頃から、アヘン戦争の惨禍を記した『乍川記事詩』（嘉永元（1848）年）や『表忠詩鈔』（同３年）の編纂、火砲発射に必要不可欠な硝石製造法を記した『遠西硝石考』（嘉永４年）の執筆に加え、安政元（1854）年に藩主にカノン砲を献上して研究に従事した様子が伺える。しかし圭介が研究を遂行するには関連の所謂対外情報を入手する必要があったが、西洋砲術家で尾張藩の洋学研究教育を指揮する上田仲敏や同藩年寄役大道寺家家臣水野正信などと行なった情報交換が重要な役割を果たしていた。以下上田および水野との関係から、伊藤圭介が入手した対外情報を概述する。

（2） 開国前後圭介が長崎から入手した対外情報

開国以前対外情報を入手するには、その集積地長崎と接触することが常套手段であった。圭介は文政10（1827）年シーボルトに師事するため赴いたが、同地とは次第に疎遠となっていく。そして天保期に至っては、九州まで広げても本草学で研究分野を同じくする豊後宇陀郡佐田村在住の賀来佐一郎と書簡交換をする程度であった。もっとも佐一郎はのちに大村藩医となり、藩の求めに応じてメキシコ漂流民太吉の見聞録『墨是可新話』（弘化４年８月）を編集し、佐一郎の従弟惟熊は西欧列国への危機意識から私財を投じて反射炉を佐田村に建造しているから、佐一郎が圭介に対外情報をもたらしたとしても不思議ではない。しかしながら佐一郎とて長崎に近いとはいっても大村に滞在し、どれほどの情報を入手していたかは定かでない。圭介が本格的に対外情報を入手できるようになるには、門人服部元民が長崎に遊学するのを俟たねばならなかった。

町医師服部元民は、安政六年にできた藩の洋学所の教授職懸となるが、それ以前の嘉永４年頃医学修行の名目で長崎に遊学し師圭介に種々の情報をもたらす。たとえば嘉永５年６月14日付圭介宛書簡で、同月５日にオランダ船が入港し新商館長が赴任したことを克明に伝えるとともに、機密に属する風説書と品物書を早々と同封してきていることは注目に値する。元民は昨年に加え再び商館長が交代したことを訝しがり、オランダの対日政策の変更を薄々感づいていることからも、同人はオランダ通詞に師事し逐一情報を入手していたことを推察させる。さらにこの６月15日付書簡ならびに同年11月頃に圭介に送った書簡で元民は、アメリカ漂流民ジョン万次郎評を伝えるが、未知なる国アメリカも含め西欧列国に脅威をも武装する町長崎で感じ取っていた。後者書簡で佐賀、薩摩の兵学を中心とした洋学研究の興隆とともに同地で洋学研究者が大事にされている情況を伝えたことはその顕われといえるが、無論尾張藩もそれに倣うことを暗示したにほかなるまい。圭介から元民の書簡は上田にも廻されたから、元民の意図は達せられたと考えてよかろう。

元民は嘉永７年３月１日長崎をあとにして同月27日に尾張に帰国するが、当然その前に長崎で起きた重大事件であるプチャーチン来航も克明に圭介に伝えた。嘉永６年７月20日付圭介宛書簡は、長崎での厳戒体制に加え、欠乏品補給と思っていた船が実は国書をもっての来

航であることを知った為政者側の対応などを伝えるとともに、警備のため出兵した大村、島原、肥前、筑前諸侯の様子を源平の合戦になぞらえるなど医師にもかかわらず武士の心意気をのぞかせる。また諸侯の軍備を的確に言い当てるところなど後に兵学研究の基礎教育機関であった洋学所の教官となる資質を備えていたといえようが、実は医学修行は名目であり西洋兵学研究を目的とした遊学であったようである。その意味で元民の収集した情報が上田仲敏にもたらされても当然といえるが、さらにいえば元民は尾張藩で西洋兵学研究に携わるために上田が派遣した人物とも推察されるのである。

元民は一定の成果を上げたことで尾張に帰国することなったようだが、同人が帰国しても西洋兵学研究や海外事情といった対外情報を圭介さらに上田らが長崎から入手できなくなったわけではなかった。嘉永２年から知己を結んでいた長崎滞在の水戸藩医柴田方庵が、以後圭介が情報を入手できなくなると考えたのか、元民の帰国に際して圭介宛書簡を持たせその中に太平天国の実状を伝えた唐風説書を同封した。そしてこの唐風説書は太平天国で中国船の来航が著しく減少している中で貴重な情報であり、尾張藩内の同好の士に回覧された。しかし圭介はこの唐風説書についてペリー（Perry, Matthew Calbraith, 1794－1858）の再来航に関する情報で方庵に応えたのみで、以後同人と積極的な情報交換は行なわなかった。どうやら圭介は方庵に頼らずとも間接的に機密性の高い対外情報を入手できるようになったらしい。

すなわち安政元年３月に異国船渡来の節の筆談役を命ぜられ藩側から必要な情報は与えられたであろうし、翌安政２年末に長崎海軍伝習所に赴いた勝海舟が尾張藩江戸定府の間瀬権右衛門や上田仲敏に伝えた情報を水野正信ともども間接的に入手できるようになったようである。いま圭介が入手した勝の関連情報の実態は見出せないが、水野の記録から推察するに海軍伝習の内実については熟知していたものと思われる。もっとも勝のもたらす情報ほど良質かつ機密性の高い情報ではないにしろ、長崎についての情報は江戸にいる息圭造から伝えられることもあった。しかし圭介は長崎に集積されている海外情報を江戸表に召喚される長崎のオランダ通詞らの尾張通行に際し服部元民ともども対話に臨むなど自身でも入手に心がけたが、外交の場が移り安政６年には海軍伝習が終了することで長崎に集積する対外情報は著しく質が低下したことは想像に難くない。必要な情報は江戸より収集する必要を圭介ならずとも感じたことであろう。はからずも文久元年、幕府蕃書調所で物産学研究に従事することになった圭介は、一時離れていた対外情報の入手を再び行なうようになる。

（３） 蕃書調所出役期の圭介の対外情報入手

開国以前多くの蘭法医が国内防備のために西洋兵学研究に携わったが、専門の研究者が輩出されるようになると次第に役割を終えていった。また同時に「対外」の持つ意味も国内防備に限らず外交面をも包括するようになり、西洋兵学から遠ざかっていった圭介も安政初年頃から日本と西欧列国との間に持ち上がっている外交問題に関心を示すようになる。そして文久元（1861）年10月、幕府蕃書調所に勤務することで労せずして集積する情報を入手することになる。

また蕃書調所出役期尾張藩邸内に住んだ圭介は、多岐に渉る書物と情報の収集を行なっていた前述の間瀬権右衛門とも情報交換を始めたことは注目に値する。圭介の興味の幅も広がったであろうが、圭介が積極的に収集した対外情報は自らが蕃書調所で従事する物産学研究に関するものが多かったようである。すなわち未開拓地の有効活用という観点から、領土問題の顕在化する蝦夷地、小笠原に圭介は強い関心を示している。とりわけ圭介在任期に幕府が小笠原回収に尽力し、知己で大垣藩の宮本元道のほか、本草学者の小野苓庵、栗田万次郎、阿部櫟斎らが物産調査に赴いたことは圭介をいたく刺激したらしく、同地に関わる情報の収集に努めている。そしてこの圭介の小笠原への想いは幕府勤務を辞したあとも消えることはなく、門人で圭介のあと物産学研究を継承した田中芳男から関連情報を入手しようと試

みている。また圭介は幕府勤務の間に蝦夷地研究の第一人者松浦武四郎と出会ったことにも注目する必要がある。ロシアとの領土問題を強く意識するに止まらず、松浦を尾張で蝦夷地研究に執心していた水野正信に紹介して両者の研究に裨益になった点でも評価しなければなるまい。

もっとも幕末外交上の問題は領土確定のみに限らない。通商の問題など様々な案件は幕府を悩ませたが、その際折衝のため欧州に派遣される使節および留学生についても圭介は、物産学研究に携わる立場から関心を寄せている。ここで圭介が行なっていた物産学研究について端的に述べれば、世界中の物産を日本に古来からある本草学の分類体系でなく、西洋のリンネの分類法で整理認識することであり、国内外の書物と標本類が必要不可欠であったといえる。圭介の勤務する蕃書調所および改名した洋書調所には圧倒的に双方が不足していたが、幕府は文久２年に派遣した竹内下野守一行に幕府各部署の要望を容れて大量に書物を買いつけさせたので、以後書物に関しては多少充実したことであろう。しかし標本の整備は困難を極めたようで、圭介は文久２年６月５日オランダに留学する津田真一郎に書物ともども購入を依頼している。

蕃書調所、洋書調所勤務で対外情報を容易に入手していた圭介は、突如文久３年４月尾張に帰国し、再び対外情報を直接入手することは少なくなったものと思われる。また同年５月４日に上田仲敏、元治元（1864）年５月11日に間瀬権右衛門が没したことで、対外情報に止まらず国内の政治情勢などに至るまで情報の入手が困難になったものと思われる。しかしながら圭介にとって幸いであったのは、短い期間ではあったが各界の権威の多くと知己を結んだことである。これらの人物は圭介が維新後再び東京で活動する上で助けとなったようだが、それ以前も尾張へ拠点の場を移した圭介に対外情報などをもたらしたであろうが、これについての解明は今後の課題となろう。

（４） おわりに

伊藤圭介は開国以前長崎にいた弟子服部元民と水戸藩医柴田方庵から、西洋兵学研究や海外事情に関する所謂対外情報を入手し、日本に接近する西欧列国に対処しようとした。しかし開国を境に西洋兵学研究を退いた圭介は、勝海舟が発信した長崎海軍伝習所に関する情報を間接的に入手するなどをした以外は、日本の外交上の問題も「対外」に含有されるようになるなか、長崎から外交の舞台が移った江戸に情報を求めるようになる。はからずも文久元年10月から幕府蕃書調所および洋書調所に勤務したことで、圭介は自らの見識で直接情報を入手する機会に恵まれる。もっとも文久３年４月尾張に帰国し調所勤務を辞した圭介は再び対外情報を直接入手出来なくなったが、幕府勤務の傍ら獲得した知己は情報をもたらし、明治以降東京での活動を支えることにもなったものと思われる。

なお本稿は、筆者の「蕃書調所の物産研究と伊藤圭介との関係」（「法政大学大学院紀要」第36号、1996年３月）、「蕃書調所出役期に伊藤圭介に随行した門人の動向」（『伊藤圭介日記　第三集』1997年３月）、「尾張洋学所の成立と展開―伊藤圭介関係文書を中心として―」（「日蘭学会会誌」第23巻第１号、1998年10月）、「水野正信と松浦武四郎の交際と伊藤圭介」（『伊藤圭介日記　第五集』、1999年３月）のほか、近日発表する「（仮）嘉永、安政期、伊藤圭介の長崎からの情報入手形態とその内容」および「（仮）勝海舟と尾張藩士間瀬権右衛門」をもとに作成したことを明記しておく。

シーボルトと圭介

熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター教授　　山口　隆男

伊藤圭介は医学ではなく、ヨーロッパの植物分類学の知識を求めて1827年に長崎に来訪した。他の留学生と目的がまるで異なっている。およそ半年滞在し、シーボルトと親しく接した。自然史に深い関心を寄せていたシーボルトは、日本の動植物を詳しく知るために、広汎な知識を持ち、オランダ語も理解できる人を求めていた。彼にとって、伊藤圭介は望みに叶った人であった。当時の薬品は生薬が主であったから、医学の心得のある人々は植物についての知識があった。シーボルトは当初は美馬順三や高良斉の助けを借りた。標本や生きた植物、植物関係の文献の入手に高良斎は貢献している。シーボルトはアジサイ類に興味を抱いたが、それらについての資料の収集をしてくれたのは高良斎であった。1829年に日本の植物学の状態とアジサイ類に関したシーボルトの論文がドイツで刊行されたが、高良斎が書いた草稿が役に立っている。しかし、シーボルトは高良斎に全面的に頼ることはなかった。シーボルトは賀来佐一郎に協力を求めるようになり、圭介が長崎に到来した後は彼に頼った。

ツュンベリー（Thunberg, Carl Peter, 1743－1828）が1784年に刊行した「Flora Japonica」はシーボルトにとって貴重な参考文献であった。ツュンベリーは日本に1775年に着任したが、翌年には出島を去ったので、在日期間はわずかに１年と３ヶ月に過ぎなかった。しかし、不自由な状態に置かれていたにもかかわらず、精力的に動植物を収集した。「Flora Japonica」には顕花植物が735種、シダ植物が44種、蘚類が５種、苔類、地衣類、海藻類は合計して19種、菌類は９種が記述されている。合計すると812種になる。新種として紹介されたものは309種に達している。また、新属が22設けられた。「Flora Japonica」は平易に記述されており、和名が判明したものはそれも示されている。産地も記されている。読者に親切な著作であった。シーボルトは「Flora Japonica」に記述されている種を具体的に知りたいと思った。彼が収集した植物がすでに「Flora Japonica」に含まれているものなのか、あるいは学界に未知の新種なのか、区別することはシーボルトにとっては重要であった。そのためには、日本の植物について広汎な知識を持つ日本人の協力が絶対に必要であった。シーボルトは自然史研究の中心地、江戸と尾張、に在住する研究者と接触することが大切であると信じていた。シーボルトは日本では各種の動植物がかなりの程度に区別され、命名されていることを知った。和名を示せば、その生物の標本を入手できる。また、情報も集めやすい。したがって、和名を調べるのに努力した。しかし、地方名ではなく、中央における名前を知ることが肝要で、地方名では間違いが生じかねない。全く同じ植物あるいは動物であっても、長崎と中央では和名が異なる場合があることをシーボルトはわきまえていた。

圭介は「Flora Japonica」に記述されている種が何かをシーボルトと共に突き止め、その一方で、シーボルトからリネー（リンネ）がどのようにして植物を分類しているのか、基本を学んだ。シーボルトとの共同研究の成果は1829年刊行の『泰西本草名疏』に盛り込まれ、リネーの植物分類が分かり易く解説された。尾張に戻ると、圭介はこの書物の執筆と刊行に情熱をそそいだ。植物の和名はイロハ順に漢字名と共に示されている。一方、ツュンベリーやリネーが与えた学名はアルファベット順に示された。シーボルトが与えた学名も23示されていた。和名に対応する学名を容易に知ることができるような工夫がなされており、それぞれの種が所属する綱や目もすぐに判るようになっている。

リネーの植物分類は花の構造の違いを基本にしている。当時の日本では花の機能が十分には理解されていなかった。圭介は花粉、雄蘂、雌蘂などの用語も創案して花の役割を解説し

た。日本では種の概念がまだ曖昧であったが、この著作では種と属の概念がきちんと示された。属は類という用語で示された。（現在は宇田川榕菴が使用した属という用語が用いられる。）また、綱、目という分類単位も用いられた。原稿はシーボルトに届けられ、シーボルトは学名、命名者名などを入念にチェックした。その後にシーボルト事件が起こり、圭介はシーボルトの名前を示すことができず、変名を用いなければならなかった。『泰西本草名疏』は圭介の自家出版物であった。好評で、長期間に亘って少部数づつではあったが刊行が続いた。

オランダのライデン市の国立植物標本館には多数のシーボルト関連の標本類がある。私はそれらに関した調査を1994年に開始した。これまでに13回の現地調査を行い、シーボルトが日本人から貰った標本を含む合計8,900枚を調査した。調査には５名の日本の植物学者が参加した。

残念なことであるが、シーボルトは日本人から貰った標本に産地とか収集者に関した記録を一部の例外を除くと記入していない。和名が記入されたものが多いが、それ以外のこと、誰から貰ったのか、産地はどこかといったことは、通常は示されていない。シーボルトは収集に熱心であったが、植物でも動物でも、あるいは民族学的資料であっても、個々の標本、資料に関した情報をごく僅かしか残さなかった。産地や収集者、寄贈者、あるいは購入の事情、価格に関した情報類はあまりにも乏しい。シーボルトに関した調査研究では、標本の点数は多いにもかかわらず、不明のことばかりで、研究者は困らされている。

ライデンの国立植物標本館には収集者が Keiske になっている標本が多数ある。しかし、調査が進むにつれ、日本人による標本が便宜的に圭介収集とされていることが判明した。本当の収集者は誰なのか、それを特定する作業が必要になった。私はラベルに記入されている和名の字体、用いられた台紙の特色などを手がかりにして、伊藤圭介、水谷豊文、大河内存真が作成した標本をある程度識別できるようになった。シーボルトが和名に関心が深いことが知られていたからであろう、彼が貰った標本の多くには片仮名で和名が記入されている。筆跡が採集者を知る手がかりとして役立った。

何とか確認できた圭介、豊文、存真の標本はそれぞれ、294種339枚、252種257枚、145種159枚である。他に二宮敬作、高良斎のもの各２枚、岡研介、美馬順三関連のもの各１枚、桂川甫賢関連のもの37枚、筑前藩主の黒田斉清のモミジ類の標本を特定できたが、尾張の３名に比較して驚くほど少ない。圭介の標本がもっとも多いが、その中には日光の地名が記されたものが数枚含まれている。最近になって賀来佐一郎の筆跡の特色が明らかになり、彼の標本が何枚かあることが判った。誰によるのか不明のものはおよそ250枚で、収集者の特定は今後の大きな課題である。なお、ライデンにおける我々の調査は完了していない。全体の30パーセント程度が未調査なので、圭介ら日本人による標本の数は実際にはもっと多い。

圭介は別に合計14冊の標本帖をシーボルトに贈っている。収録された種はおよそ480である。標本帖は第一部と第二部から構成されている。第一部７冊には272の標本が含まれている。圭介は長崎来訪時にそれらをシーボルトに贈った。顕花植物の他にシダ類も含まれている。シーボルトは圭介と標本を調べ、圭介に学名を教えた。第二部７冊には217が貼られているが、圭介が尾張に戻ってから送り届けたものである。どちらも、構成は本草綱目的であり、草、木と区別され、和名が記されてイロハ順に標本が貼られ、通し番号が与えられている。第二部はリネーの植物分類について学んだ後に作成されたが、新知識を生かした構成にはなっていない。しかし、標本の質が向上しており、オランダ語の解説が加えられたものもある。標本帖はシーボルトだけではなく、ライデンの国立植物標本館の第２代目館長のミケールによっても活用された。彼は学名を記入し、興味ある標本は台紙ごと切り取って、別の台紙に貼り、通常の標本として扱った。切り取られた箇所は合計して57である。（前述の圭介の標本数には、標本帖由来のものは含めていない。）

圭介の師の豊文は「物品識名」を刊行した。これは動植物、その他の自然物を片仮名でイロハ順にリストし、漢字名が添えられたもので、簡単な解説が付記されている場合もある。

「本草綱目」に沿った構成になっているが、自然物の漢字名を知るのには至って便利な著作である。シーボルトは「物品識名」に示されている植物は何か、圭介と一緒に調べた。「Flora Japonica」では扱われなかった種を知るのに、その作業は役に立った。一方、シーボルトは賀来佐一郎の協力を得て日本植物のリストを作成中であった。ツュンベリーが記述した種に加えて自分が見つけ出した種もリストした。圭介が長崎に来ると、その作業は圭介にゆだねられて進展した。

一方、動物に関しても圭介はシーボルトを助けている。シーボルトと接した頃の圭介には尾張で物産会を開催した経験もあり、日本の自然物についての広い理解があった。尾張の物産会では、植物だけではなく、動物も扱われていたし、鉱物や岩石類もいろいろと出品されていた。幅広い知識が無いと、責任者にはなれなかったはずである。シーボルトはドイツの自然史学者のオーケンの動物学の教科書を所有していた。それには40葉の図版集が付属している。原生動物、扁形動物、軟体動物、昆虫類から哺乳類に至る各種の動物の図が１葉あたり13から100示されている。シーボルトは圭介に和名の記入を依頼した。日本に産しない種が多いので、圭介が記入した図は一部に限られているが、概して適切な和名が示されている。圭介は標本作製法に関した小冊子を翻訳した。著者はオランダの国立自然史博物館の館長のテンミンクである。昆虫、鳥、哺乳類など各種動物の標本の作製方法が実に要領よく記述されている。ライデンからシーボルトへ送られてきたものであった。

圭介とシーボルトは仲が良かった。彼はシーボルトに贈呈した本の１冊に「私の自然史研究の友人のシーボルト Mijnen natuurkundigen Vriend von Siebold」と書き込んでいた。師と門人の関係ではない。友人であり、共同研究者であった。なお、圭介の指導者としての水谷豊文の存在が重要である。彼がシーボルトに贈呈した植物の標本は輸送の便を考えてであろう、台紙は小型で標本も小さいが、要領よく作成されており、種の数も豊富である。一部の標本にはオランダ語で花の色が示されており、花が欠けた標本には花のスケッチが加えられている。実用を目的とした本草学ではなく、まさに植物学的な標本である。また、豊文は自分が入手した蝦夷の植物標本に加えて、自筆の植物や動物の図譜類もシーボルトに贈っている。彼は偉大な自然史研究者であり、オランダ語の知識もあり、ヨーロッパの植物分類システムに関心を寄せていた。圭介は豊文から様々なことを学んで身に付けており、その知識と彼自身の学問的情熱、彼の性格がシーボルトと良好な関係を結ぶ上で役に立ったと思われる。

圭介と尾張の洋学

名古屋芸術大学教授　　**岸野　俊彦**

（1）　吉雄常三と伊藤圭介

尾張の洋学を考えるさい、天明期から化政期にかけての野村立栄・小川守仲・原道円・朝比奈厚生・人見璣邑と本多利明の関係など、蘭方医学から世界地理、北方問題や西洋事情など幅広い展開を見ることができる。これを背景に、化政期から天保期の尾張の洋学の発展に大きな影響を与えたのは吉雄常三であった。常三は、長崎の大通詞吉雄耕牛の孫で、叔父吉雄権之助は、蘭・英・露・仏語に通じ、シーボルト鳴滝塾の創設者であった。常三は、文化13（1816）年に小川守中宅に半年間逗留したのを契機に名古屋との結びつきを持った。小川守中は、京都の辻蘭室にも従学し大坂の木村蒹葭堂とも交友を持った。常三は、文政９（1826）年に、二人扶持で尾張藩に登用され、以後累進し、天保10（1839）年には奥医師となっている。

常三は、医学・天文・暦学・化学など、幅広い学識を持っていた。伊藤圭介は、文政４年より常三に洋学を学び、文政10年には常三の叔父吉雄権之助の家に止宿し、長崎でシーボルトに博物学を学んだ。長崎で圭介と同時期にシーボルトに学んでいた高野長英は、天保元年に名古屋を訪れ、圭介や常三、水谷豊文と逢っている。天保期に攘夷論や海防論が問題になると、尾張藩も外国通としての常三に、攘夷対策としての意見を諮問することがあった。しかし、常三の一族で幕府天文台詰となった吉雄忠次郎がシーボルト事件に連座して罪を得たり、長英が「蛮社の獄」で入牢するというような、天保期の状況の中で、「私儀、元来家業にて和漢の医書のみ研究つかまつり、外夷の風聞等、承り申さず」と慎重な態度をとった。

常三は、政治にかかわる部門については、公的には慎重な態度を取りつつ、科学技術部門にエネルギーを投入した。常三は、蘭学を翻訳する中で、外国では当時雷管銃の実験が行われているとの知識を得た。雷管というのは、鉄砲にこめた弾薬に点火するための発火物のことである。日本では、近世初期以来の火縄式の銃が中心であった。そこで、独力鉄砲火薬の研究を始めるのである。この研究を伝えるものが、著書『粉炮考』である。常三は、その材料である発煙硝酸を作り、焼酎や廃酒を蒸留してアルコールを製し、水銀を加えて火薬を作った。常三は火薬の実験中に爆発のため天保14年に死去した。

（2）　尾張洋学館の創設と挫折

天保11年にアヘン戦争、同12年には、水戸藩の斉昭が大砲を鋳造し、高島秋帆が幕命によって、徳丸原で洋式銃隊の訓練を行うなど、海防にともなう西洋事情の研究と西洋式軍制改革が課題となりつつあった。常三の研究はこうした情勢に対応したものであった。常三死後、この課題を継承したのは、上田仲敏と伊藤圭介であった。圭介は、常三存命中の天保12年に初心者のオランダ語習得の便宜を図った『万宝叢書洋字篇』を編纂した。圭介の長子圭造と門弟の西村良三（後の柳川春三）が校訂している。上田仲敏は城内三の丸に屋敷を持つ800石の上級藩士で、天保末年ころから、自邸で伊藤圭介や常三門下の人々と私的な蘭学研究会を開いた。仲敏は、天保13年に御弓持頭として江戸に行き、翌年幕府が四谷角筈に大砲射撃場を作ったことなどを見聞し、帰国後本格的に西洋砲術研究に着手した。弘化３（1847）年に仲敏は御本丸詰物頭となるが、この頃から私的研究会から藩公認の藩士教育の場としての蘭学塾をめざした。藩も美濃出身で長崎の洋式練兵所で砲術の研究をした、田口俊平を招聘した。山田千疇『椋園雑記』によれば、田口は嘉永元（1848）年12月頃解任される。その後、

長崎の白石平兵衛が尾張藩出入りとなり、上田仲敏に「蘭法皆伝」するように命ぜられている。上田邸の蘭学塾は嘉永元年ころ藩営「洋学館」となり、田口や白石を雇用して洋学や西方砲術を伝習させたと思われる。嘉永元年、伊藤圭介は『乍川記事詩』を著し、清国のアヘン戦争敗北が外国蔑視によるものとし、海防充実を主張した。翌嘉永２年上田仲敏は西洋砲術を学習する初心者のために『砲術語選』を編集する。これは、関係あるオランダ語を対訳してイロハ別に類集した小冊子で、「洋学館」での教科書として用いられたと思われる。この著には伊藤圭介の序が付されている。嘉永３年４月には上田仲敏は西洋砲術門下であった船奉行千賀与八郎（信立）と知多の異国船防御場所の検分を行う。（『椋園雑記』）

嘉永３年末から４年にかけて、新藩主慶勝初入国のもとで、矢田河原で砲術訓練が行われる。嘉永４年８月には船に大砲を乗せ、船奉行の千賀と、城代肥田孫左衛門同行のもと、大筒役の上田仲敏が試射をする。９月には、矢田河原で西洋砲の試射が行われる。この試射には上田や上田門下の30人程が参加している。上田仲敏『辛亥雑記』には、嘉永４年２月に伊藤圭介と大津助之丞が、熱田に宿泊した長崎のオランダ通詞西吉兵衛、名村定五郎より得た情報が記されている。その内容は、薩摩藩が家老・用人ら全員一致で西洋砲術に転換し、野戦砲70挺・モルチール50挺・銃1000挺などを持ち、竹下清左衛門を中心に32人の世話役による西洋銃陣体制が成立したことなどである。薩摩の情報は、伊藤圭介の門人で長崎遊学中の者からも伝えられている。薩摩の砲術家は、現在では翻訳書ではなく、原書で研究していること、薩摩藩と佐賀藩では西洋学者が大いに登用され、砲術・政治が一変したという。圭介の門人はこれを「羨むべき事」と書き送っているが、仲敏や圭介の「洋学館」教育の目標は、こうしたところにあったと思われる。この年には、伊藤圭介は火薬研究のために『遠西硝石考』を著した。

翌嘉永５年、仲敏は初学者教育を急ぎ、『西洋砲術表之巻』を編纂する。翌６年にはペリーが来航し、仲敏は『西洋砲術便覧初編』を出版する。この書は、仲敏著となっているが実際に翻訳著述を行ったのは西村良三（柳川春三）だといわれている。序は伊藤圭介である。奥村得義『松濤棹筆』はこの年、上田邸玄関に多数の大砲の台車が並べられ、大砲鋳造のための金銅が大坂で購入され、鍋屋町鋳物師頭に届けられていると記している。伊藤圭介はこの年、西洋流の大砲（カノン砲）を鋳造し、これに「丹心報国」と記して藩主に献上する。12月の町触は、硝石製作のため木灰を残らず上田邸へ持ち寄るよう命じているので、「洋学館」での火薬製造は進行していた。こうした加判肥田孫左衛門、側用人滝川又左衛門、船奉行・用人千賀与八郎、「西洋家師範」上田仲敏らの連携による、西洋式軍制改革路線は進展するが、藩内体制としては、藩主慶勝支持派の大勢は稲富流など旧式の砲術や長沼流兵法、国学グループなどであった。『椋園雑記』によれば、海防掛の用人衆が西洋流への全面転換を願うが藩主慶勝は容認しなかったという。

やがて守旧派勢力の圧力の中で、安政２（1855）年10月上田仲敏は「御台場砲術惣裁」を解任され、翌安政３年には西洋砲や玉薬製造、教育にかかわった者が解任され、尾張藩の西洋式軍制改革は挫折し、安政４年に仲敏は「六国史校合惣裁」となり、「洋学館」は事実上閉鎖となる。こうした情勢のなかで、「洋学館」の俊才、西村良三（柳川春三）や宇都宮三郎は、脱藩する。

（３） 洋学館の復活と再度の挫折

安政５（1858）年、日米通商条約調印に反対した藩主慶勝は、水戸の斉昭とともに隠居・謹慎となり、慶勝の弟の茂徳が新藩主となる。新藩主茂徳は幕府と同様に開港、西洋式軍制改革路線を取り、安政６年尾張藩は幕府に準じて西洋式軍制に転換する。名古屋では、城代滝川又左衛門、用人・船奉行千賀与八郎が銃陣惣裁となり、江戸詰藩士の教育のため、上田仲敏を江戸詰の銃陣師範役とした。４月に江戸に向かった仲敏は９月には「西洋流出精」「門人親切に取り立て」たことを理由に書院番頭格に昇進する。（『椋園安政録』）仲敏留守中の名

古屋の西洋砲術教育は、上田邸の洋学館を教場とし、伊藤圭介らに教授役を任せる必要があった。尾張藩は６月に圭介を７人扶持の寄合医師に取り立て、12月には上田邸の「洋学所出仕」「惣裁心得」を命じ、あらためて藩営の「洋学所」として西洋砲術教育を再開した。奥村得義『金城温古録』によれば、藩営となったこの時期の洋学館の教授役には圭介のほか、寄合組300石の戸田五郎兵衛が任命され、御目見医師の服部元民と、町医の島静義が補佐役として勤番し、「有志の学生が日々集まり」「大砲兵道の御隆盛、此時を以て栄とすべし」と記している。

文久元（1861）年９月、伊藤圭介は幕府より蕃書調所物産学出役を命ぜられ、江戸に出た。圭介の文久２年日記には、名古屋の上田仲敏や、滝川、千賀など西洋砲術推進派の人々との情報交換の様子を見ることができる。この頃、尾張藩体制は緊迫した情勢となっていた。万延元（1860）年３月の桜田門外の変で井伊直弼が暗殺されると、幕府の体制も代わり前藩主慶勝が赦免され、文久２年閏８月には慶勝支持の尾張藩尊攘派80名が付家老成瀬に、慶勝の藩主再任、西洋砲廃止、国学復活などを要求した連名上書を出す。この結果、成瀬と幕閣の連携の中、藩主茂徳を支えた付家老竹腰や側用人武野新左衛門が隠居する。こうして、西洋式軍制改革反対派の復活の中で、翌文久３年５月に尾張洋学館を主導した上田仲敏が死去し、８月には藩主茂徳も隠居に追い込まれる。この結果、藩営の洋学館は廃止となり、西洋式軍制改革も挫折する。こうした状況の中で、伊藤圭介はこの年４月に江戸より帰国し、蕃書調所の辞任を藩に申し出て、12月に幕府開成所（旧蕃書調所）を辞任する。圭介は、上田邸の洋学館を圭介宅に移し、洋学堂とよんだ。洋学堂は医学・本草学・物産学が中心となり、軍事・化学関係の展開は見ることができない。慶勝体制復活後も圭介は、尾張藩の御用医師として奥医師見習に昇格し、幕末維新の尾張藩の出陣のさいの従軍医師として期待された。

現代植物学からみた圭介の業績

東京大学総合研究博物館教授　　大場　秀章

（1）　現代植物学の誕生と当時の日本

植物と人間の関わりは、食料や牧草、薬草、儀式への利用に端を発する。こうした有用性の有無に関わらず、あらゆる植物を研究する植物学がヨーロッパで本草学から起こった。18世紀半ばといってよい。今日と違って微視的な構造やタンパク質のような物質を観察・分析する機器や多量のデータを解析するコンピューターもなかった時代だったので、その生きるさまを解明することはできなかった。このような中で多様な植物界を類似性に則して体系化することや、種を識別し、体系上に位置付けること、種や上位の分類群の形態や生理、生活や分布などの特徴を明らかにすることを目的とした研究が進んだ。今日の植物分類学、植物地理学、植物形態学、生態学といった分野に当たるが、中でも基礎となったのは植物分類学である。他の分野の研究も当初は個々の植物種や分類学が明らかにした体系上の位置が具有する形態・生理学などの特徴を解明することを目ざしていたといってよい。こうした種を中心とした実物研究のことを博物学あるいは自然史学というが、現代植物学は博物学から出発するのである。

現代植物学は、未知の植物に対しても適応でき、学名によってその分類体系上の位置を示すことを創案したリンネをその始祖とする。1735年に刊行された『Systema Naturae（自然の体系）』、1737年刊の『Genera Plantarum（植物の属）』、1753年刊の『Species Plantarum（植物の種）』が重要な著作である。リンネの分類法や体系はヨーロッパで広く支持を得た。現代植物学の誕生の機が熟していたからに他ならない。

当時日本では吉宗が殖産振興を政策として実行し、1734年（享保19）には丹羽正柏の書物編纂のために産物帖の作成提出が松平乗邑の名で各藩に指令が出され、青木昆陽が1735年に小石川薬園でサツマイモを試作した。41年に野呂元丈が阿蘭本草御用となり、幕府書庫中にあったヨンストン（Johnstone, John）やドドネウス（Dodonaeus, Rembertus）の本草書を初めて紐解いた。1763年には平賀源内が『物類品隲』を著していた。これらの状況から察するに、日本ではこの時代、現代植物学に先立つ本草学がようやく隆盛に向かう状況にあったというべきで、ヨーロッパと比べ100年近くの遅れがあったといってよい。

（2）　圭介誕生と尾張

江戸時代、名古屋は城下町として栄えたが、18世紀後半から19世紀にかけて本草学が盛んであった。特に、水谷豊文はこの時代の日本で最も傑出した本草学者で、実際に博物を分別・同定する資質に優れていた。また、豊文は、リンネの『自然の体系』に基礎にオランダ語で書かれたホッタイン（Houttuyn, Maarten）の『Natuurlijke Historie』を所持し、これを参考に日本の植物の学名を決めていたのである。独学とはいえ、その読解の正確さにシーボルトは絶賛している。

伊藤圭介は1803年（享和３）に生まれた。医者で学問好きの父、兄の大河内存眞、さらに水谷豊文に学んで、本草学を修めた。圭介が書籍による解釈学としての本草学ではなく、植物を中心とした博物学へ一層の関心があったことに注意すべきである。この実物への関心は父玄道を核とする家の教育と豊文の指導の賜物といってよい。即物的・実証主義的な姿勢は近代科学を貫く基本姿勢であり、こうした性向をもつがゆえに圭介は、外国人お雇い教師や欧米に留学し帰国した新時代の研究者とともに、明治時代の近代科学としての博物学の確立・

発展に自ら参画しえたのだろう。

1826年（文政９）、圭介は28歳のとき、水谷豊文や大河内存眞とともにシーボルトに面会し、後に長崎に遊学することになった。だが、長崎で圭介はシーボルトから植物学を順序だてて基礎から学ぶことはなかった。塾頭岡研介と日々出島に通い、標本等を利用して植物を同定し、関連した知識を交換した。シーボルトは「予は是圭介の師なり、亦圭介は予の師と謂べきなり」といったという。シーボルトらの『Flora Japonica』には、シーボルトが記述したと考えられる覚え書がある。これには日本人として圭介、宇田川榕菴、小野蘭山、桂川甫賢、二宮敬作、水谷豊文、美馬順三、最上徳内等の名前が出てくる。最も多いのが圭介（七回）であり、豊文（六回）、榕菴（四回）がそれにつぐ。このことからもいかにシーボルトが圭介及び師の豊文を日本の植物に関する一級の博物学者（ここでは植物学）としてその言を信頼していたかが判る。だがシーボルトが圭介を植物学者として信頼し、お互いに切磋琢磨したのは、圭介が単に知識として、植物の名前を空んじていたからだけではない。類似種から識別しえるだけの物自体についての認識力、鑑識力を伴っていたことが大きい。この点で圭介、そして師の豊文の右にでる博物学者は当時の日本に存在しなかったといってよい。

（３）『泰西本草名疏』の刊行

圭介は父の病の報を受け半年で長崎を去る。シーボルトは餞別としてツュンベルク（Thunberg, Carl Peter, 1743−1828）の『Flora Japonica』を贈った。圭介はこれを読み研究し、その成果として文政12年（1829）に『泰西本草名疏』の板刻を完成した。圭介は、ツュンベルクの解説から植物分類学の創始となったリンネの雌雄蘂にもとづく「二十四綱分類体系」の概要を知った。江戸時代の本草学者は植物の体系分類には無知であった。ツュンベルクの解説はオランダ語ではなくラテン語であったため、判読理解に苦しみながらも、圭介はその体系について理解をえた。『泰西本草名疏』の本冊はツュンベルクが日本から記載した植物に対しての一種の学名・和名対照表といえる。この作成作業を通じて圭介はすべての動物・植物に学名が与えられていることを知った。『泰西本草名疏』をもって植物分類学は日本にも紹介されたことになった。しかし、それはただ紹介されただけに終ってしまったというべきである。圭介自身も以後現代植物学の手法に沿った研究は行っていない。その意味では彼は植物分類学の始祖リンネの植物の二十四綱分類体系の単なる紹介者に過ぎない。

圭介が研究を放棄した理由として、当時すでに蓄積されていた膨大な文献（ツュンベルクが引用している）がほとんど入手不可能であったこと、当時の学術の公用語とされたラテン文を読むことが困難であったことをあげることができると思う。この二つの点に対する取組みは東京大学の創設とともに始められる。膨大な文献を購入しなくてはならなかったが、初代教授矢田部良吉も第２代教授松村任三もそのことに最善を尽くした。ラテン文はそうした文献を解読する点でも重要であったが、ケーベル（Koeber, Raphael von）をはじめお雇い外国人教師、さらにはカトリック教会牧師から直接学ぶこともできるようになっていた。

（４） 本草学と現代植物学

圭介をはじめとする江戸時代の本草学者はかたちの相違により、植物の「種類」を認識していて、これらの種類一つひとつに名前をつけていた。彼らの「種類」の概念は、現在の分類学の「種」に類似はしているが、基本的には異なるものである。彼らはまた、共通の特徴によりまとめられた、カシの「類」などのような、植物分類学で用いる「属」に相当するようなグループを認識していたと思われる。本草学から植物分類学への脱皮には「種」と分類階級の正しい理解が欠かせない。圭介がどこまで、そうした脱皮を成し遂げていたのだろうか。今後の研究が待たれるところである。

さらに、現代植物学の中心となった分類学は、新しく発見されたどんな植物もその分類体系上の位置を与えることができるという普遍性をもっている。つまり、未知な植物を解析し、

既知の分類体系上での位置を決めることができた。一方、新たに加った分類群によって、既知の分類体系の論理性に矛盾が生じたときには、分類体系そのものを再構築する方法論も確立していた。『本草綱目』にはこうした汎用性、すなわち未知な植物を分類体系に位置づけ分類体系を再構築する、という発想は乏しい。しかも、『本草綱目』をとりいれて研究を行った江戸時代の本草学者の研究も、体系そのものを考察するにはいたらなかった。

ところで、シーボルトのもとで過ごした半年は後の圭介の人生を決定付けるものとなったが、江戸時代には圭介がシーボルトから学んだものごとを開花させる環境は整ってはいなかった。名古屋に帰った圭介は表向きは医者としての稼業を続けながら、博物学の研究と資料の蓄積をはかっていた。59歳になった文久元年（1861）に幕府により蕃書調所へ出役を命ぜられた。さらに、明治時代に変り、東京大学の揺藍期に請われて出仕した。こうして圭介は、本草学・蘭学という枠組みの中で行われてきた江戸時代の学問を現代植物学へと繋ぐ橋渡しの役目を果たすことになった。「生涯現役」であった晩年、東京大学員外教授（後に教授）として現代植物学研究を担うことになった。

（５） 東京大学の創設と現代植物学の開花

近代植物学のスタートに当たって人々が直面したのは、知識は実体があってはじめて意味をもつことである。つまり、研究対象の植物を研究者自身が類似種から区別できて、はじめてその研究が成り立つという性格である。これはいくら語学力に堪能で、諸外国の言葉で記された文献を読むことができても、それだけでは植物学の研究にはならないことを意味している。その対象である植物を野外で、実際に見分け発見できてこそ、研究の第一歩が印されるといってよい。コーネル大学に学び植物学の体系には通じていた東京大学初代教授矢田部良吉が日本の植物に通暁していたとは思えない。留学前の彼の教育には日本の植物に対する関心を示すものはほとんどないからである。圭介はこの点でまったく矢田部とは違っていた。

矢田部教授は、助手の松村任三、大久保三郎を伴って日本各地に植物採集にでかけた。彼ら自身の手で標本を集め、それを同定することで、文献上の知識だけでなく、対象とされた植物自体の認知にも努めた。圭介はこうした発展途上にある日本人による日本植物学の研究に手を貸したであろうことは想像に難くない。彼は野外で種を区別し、その植物の名称を述べることができたのである。こうした圭介の知識と伎倆は後進国日本に日本人の手により植物学を設立していくうえで、欠かせないものであった。

こうした圭介の資質を合せもった小石川植物園での調査研究の成果のひとつが、明治10年に東京大学理学部印行として出版された『小石川植物園草木目録』である。これは東京大学における最初の学術的出版である。明治13年には『小石川植物園草木目録後編』が出版された。また、賀来飛霞と共に『東京大學小石川植物園草木圖説』を著している。その第一冊は明治14年に出版された。これは、画の質や印刷が当時の欧米の水準に達しており、世界の植物研究者から注目され、小石川の名前が世界の植物学界に知られる契機となった。

しかし、在職中は専ら植物園で植物を同定研究して過ごしたこともあり、一人も後継者を育てることはなかった。1901年（明治34）１月に圭介はほぼ一世紀に及ぶその波乱に満ち、実り多き生涯を閉じた。

伊藤圭介略歴

伊藤圭介（いとうけいすけ）は享和３年（1803）、名古屋呉服町にて生まれ、明治34年（1901）、98歳で東京にて没した。

幕末・明治前期の本草学者・植物学者・博物学者である。父は医師西山玄道、兄は大河内存真で、圭介は伊藤家の嗣子となり、錦窠と号した。

文政３年（1820）18歳で名古屋にて町医として壱人立、翌年京都の藤林普山について洋学を修め、文政10年長崎のシーボルトのもとに遊学した。帰る際にチェンベリの『Flora Japnica』（日本植物誌）を贈られ、これを基に『泰西本草名疏』を著わし、リンネの「植物分類式」＜二名法＞を紹介した。文久元年幕府に招かれて江戸・蕃書調所に出仕、翌年物産局教員となった。

明治になってからは主として小石川植物園に関係した。『錦窠植物図説』など多数の著作物がある。東京大学教授で、本邦最初の理学博士である。

主催：名古屋大学附属図書館　名古屋市博物館
とき：平成13年９月16日（日）午後１時30分～４時30分
会場：名古屋市博物館講堂

実行委員

伊藤義人	名古屋大学附属図書館長
遠藤正治	愛知大学非常勤講師・圭介文書研究会事務局長
山内一信	名古屋大学大学院医学研究科教授
西川輝昭	名古屋大学博物館教授
杉山寛行	名古屋大学大学院文学研究科教授・附属図書館研究開発室室員
秋山晶則	名古屋大学附属図書館研究開発室助手
種田祐司	名古屋市博物館学芸員
吉田純子	名古屋大学附属図書館事務部長
藤森末雄	名古屋大学附属図書館情報管理課長
玉木　茂	名古屋大学附属図書館情報サービス課長
小花洋一	名古屋大学附属図書館情報システム課長
加藤信哉	名古屋大学附属図書館情報管理課課長補佐
髙橋律子	名古屋大学附属図書館情報サービス課図書館専門員
薮本大明	名古屋大学附属図書館情報システム課図書館専門員
濵島　聡	名古屋大学附属図書館情報管理課庶務掛長

江戸から明治の自然科学を拓いた人

―伊藤圭介没後100年記念シンポジウム―

Keisuke Ito: Pioneer of Natural Science from Edo to Meiji Era

―Memorial Symposium in Honor of Keisuke Ito―

発　行　日：平成13年9月10日
編集・発行：名古屋大学附属図書館
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
TEL：052-789-3684　FAX：052-789-3694
http://www.nul.nagoya-u.ac.jp

©名古屋大学附属図書館